# 鄭振鐸とタゴール文学

## ——文学研究会結成前後における文学意識の一面——

【鄭振鐸研究ノート(一)】

芦田肇

近代文学の黎明期、若き文学の担い手たちが、「新文学」に触れ、次第に近代の「文学精神」、あるいは近代文学の「手法」を自覚して、あるものは創作に情熱を傾け、あるものは外国文学の翻訳に傾注し、またあるものは近代文学団体の結成に努力する。彼らにとって、なぜとりわけ「文学」でなくてはならなかったのか？「文学」をどのように自覚していき、どうとらえたのか？　彼らはその時期、どのような近代文学の作品を繙き、そのなかの何かに共感し、何に反発し、どのような「文学精神」を築きあげていったのか？　そしてそれらは、個々の担い手たち相互でどのような違いをみせたのか？　その違いを生みだしたものは何だったのか？　これらの「問い」は、私自身がかつて「文学」と出逢い、「文学」と多少なりとも関わりを持ち続けてきたことについての想いに重なっていき、そこから再度、中国近代文学の黎明期を担った文学者の想いへと戻っていく。

## 一

中国で最も早い近代的な純文学団体である文学研究会は、一九二一年一月四日、北京中山公園の来今雨軒で正式に成立大会を開催し、内容を刷新した『小説月報』を機関誌として名実ともにその発足を見る。(1)

郭沫若の『創造十年』の中の次のような記載がある。

「雁冰は当時やや進歩的な思想を持っていたが、彼の思想が振鐸と同じだったようでもない。文学研究会の何人かの作家、たとえば魯迅・冰心・落華生・葉聖陶・王統照にしても、同じ瓢簞の薬でもなさそうであった。雁冰があのころ振鐸といっしょにやっていられたのは、むしろ私たちの一つの驚異だった。(2)」(小野忍・丸山昇訳による)

雁冰、すなわち茅盾がいかなる「進歩的な思想」を有していたのか、またどのような点で鄭振鐸の思想と異なっていたのかについて、『創造十年』は具体的に述べてはいない。しかし、茅盾と鄭振鐸の「合作」(原文)、すなわち文学研究会を実質的に支えた両者が異なった「思想」をもちながら、彼らが一緒にやっていることに対して、郭沫若がそれを「驚異」(原文)として受け止めたという記載に注目したい。つまり文学研究会は、かなり色合いの異なった文学傾向、ないしは全く異質の文学主張を持ったものがひとつに合流して、文学結社としての発足を見たのであり、創造社メンバーにとっては、それはいとも腑に落ちない、あるいは途方もない文学結社のあり方として映ったのではないだろうか。それは、創造社との対立が激化する中で、なお一層理解に苦しむ印象を彼らに与えたことは想像に難

くない。郭沫若のこの「驚異」という形容がそれを端的に示している。

『小説月報』第十二巻第一号、すなわち同誌が文学研究会の機関誌となった最初の号に、茅盾は「文學和人的關係及中國古來對於文學者身分的誤認」を書き、その中で「文学の目的は総合的に人生を表現することであり、写実の方法を使おうと、象徴・比喩の方法を使おうと、その目的はやはり人生を表現し、人間の喜びと同情を拡大し、その背景となる時代の特色を持つことである」と述べて、「文学は人生の表現（反映）である」という、いわば彼の原理的な文学認識を明らかにし、目指すべき新文学のあり方を率直に表明した。そして以後、これは彼の文学観の基軸として、多岐の分野にわたる文学関心の中に、生涯を通して貫かれていく。(3)

同じ号の『小説月報』には、ややともすれば見過ごしてしまいそうな、「埋草」の短文が数篇載っている。「文藝叢談」がそれであり、その〔一〕〔四〕〔六〕は、鄭振鐸が書いている。(4)

「文学には国境がない。なぜなら人々の文明の程度がどんなに隔たっているにせよ、彼らの風土習慣がどんなに異るにせよ、彼らの思想と感情はそれほど遠くは隔たっていないからである。プラトン、孔子の学説には現在でもまだ乗り越えることができないものがあり、日本人とスペイン人、北欧の人間の愛情は同じであり、彼らの喜怒憎恨や恐懼憂愁の情もいささかも違わない。だから人々の思想と感情を記録する文学にも、むろん溝などと言うべきものはないのである」(5)

「文学は『最もすばらしい思想の記録』（エマンソンの説）（Emerson）であるばかりでなく、人々のあらゆる感情の結晶でもある。それらはぼくらの笑い、ぼくらの涙、ぼくらの嘆息、ぼくの敬慕や恨怒、さらには瞬時のぼくらの脳裏の波動と変化を微妙かつ感動的に書きとめる。ブルック（Brooke）は文学を『聡明な男女が書きとめた思想と感

情』であるとしたが、まことにその通りである。が、彼が文学を『読者に喜びを与えるに足る』ものとだけ考えているのは、文学の偉大な効用をやはりまだ十分に理解できてないようである。読者に喜びを与えるほかに、文学の最大の功績は実に『人々の喜び、同情、そして思想の受容力を拡大する』のベネット説(Bennett)ことができるところにある。その感化力は、普遍的かつ永遠であり、偉大かつ奥深いものである。……」(6)

同じ『小説月報』に載った、この茅盾と鄭振鐸の二人の見解を較べてみると、「文学」なるもののとらえ方について、なにかしら漠とした「差異」のようなものが存在するのが感じられる。この短い文章のみで、その「差異」が何であり、何に由来するのかは不可測であり、また即断しても無意味に近いので、それは控えたい。いまはさしあたり、文学研究会が発足した時点において、茅盾と鄭振鐸という同会を代表する二人の文学認識に、何か「差異」があるのではないかという、いわば「心証」を述べて、論をすすめる発端としたい。

周知のように、文学研究会は、組織的な目標は掲げたが(7)、文学団体としての一定の文学的主張を掲げて発足したのではなかった。しかし文学研究会の個々の会員が、それぞれ独自の文学感覚、文学傾向、ないしは文学主張を有していたことは、これまた否定しようのない事実であり、それらが相互に絡みあい、作用と反作用を与えつつ、文学研究会の全体としての文学的性格が立体的にかたちづくられていったと考えることが、より文学研究会の実質に迫ることになろう。

このような観点から、文学研究会のそれぞれの会員の文学観、文学へのアプローチの過程等々を、個々の文学的営為の実際に即して析出・検討し、さらにそれらを相互に比較することは、文学研究会の文学の実相に近づくための不可欠な作業であり、それは筆者にとって、文学研究会における茅盾文学の「位置」を明らかにし、あわせて中国近代

文学の黎明期を担った諸々の「文学精神」とでも呼ぶものを解明する一過程でもある。「文学研究会」論の一環として、本稿では、同じ文学研究会の会員、その発起人の一人である鄭振鐸の文学研究会結成前後における文学観をとりあげてみたい。

## 二

文学研究会の十二名の発起人を、結成にいたる過程の、地域的、ないしは結合基盤で分けるならば、三つのグループに大別できる。それはすなわち、鄭振鐸らの雑誌『新社會』、ないしは『人道』に拠った北京の学生グループ、周作人らの雑誌『新青年』、ないしは『新潮』に属するグループ、そして茅盾の属する上海の商務印書館のグループの三つである。(8)

この中で鄭振鐸らのグループが最初に、文学研究会の結成へと結実する純文学雑誌の発刊を企図し(9)、鄭振鐸自身がほかでもないその最初の提案者であった。(10) 雑誌発行をめぐる商務印書館上層部との交渉、「文學研究會簡章」の起草など、文学研究会の結成に到る種々の具体的な段取りを責任をもって遂行したのも彼鄭振鐸であり、そのためであろう、成立大会では、彼が始めに「発起経過」を報告し、会の役員選挙で「書記幹事」に選出されている。(11)

さらに、文学研究会結成後においても、茅盾が『小説月報』の編集を担当するのとほぼ平行して、鄭振鐸は一九二一年五月から二十二年十二月まで上海「時事新報」副刊『文學旬刊』の主編の任を果たし、翌二十三年一月からは茅盾の後を引き継いで『小説月報』の編集を担当する。鄭振鐸はこれら機関誌の編集、および機関誌上での様々な文学

主張、また海外近代文学の翻訳紹介などの仕事を通して、地味ではあるが、文学研究会全体の文学傾向、あるいはその実質的性格の形成に与った。その意味で、彼は茅盾とともに、文学研究会を代表する存在だったと言ってよい。

とすれば、ほかならぬこの鄭振鐸が文学研究会結成前後の時期に、いかに文学アプローチし、いかなる文学を追求したのか、あるいは文学をいかなるものとしてとらえていたかを明らかにすることは、文学研究会における彼の文学、あるいは文学研究会全体としての文学傾向を考察する上で忽せにすることはできない。そこで遡って文学研究会の結成が目前に迫る時期に、彼が近代文学へどのようにアプローチしたのかを探り、それとの関わりで、文学研究会成立前後における彼の独自の文学傾向、文学認識を明らかにしてみたい。

文学研究会の十二名の発起人を大別して、鄭振鐸、耿済之、瞿世英、許地山、王統照の五名を一つのグループにまとめることができる。このグループを便宜上、鄭振鐸のグループと呼ぶことにする。

この鄭振鐸のグループの中で、王統照だけは一応別にして、[12] 他の四人、そして彼らに瞿秋白（文学研究会の発起人、会員にはならなかった）を加えた面々は、「五四」時期の北京で、学生生活を通して知り合った仲間たちである。

鄭振鐸は瞿秋白を回想した一文で、その当時のことについて、次のように述べている。

「一九一九年の五四運動の前後、私は彼（瞿秋白――芦田注）と比較的近しかった。彼と耿済之はともに北京の俄文専修館で学んでいたし、彼の遠縁の叔父だった瞿世英、および許地山はどちらも匯文大学で学んでいた。私は、李閣老胡同にあった鉄路管理学校で学んでいた。我々はみな東城の城壁に近い一帯に住んでいたので、お互いによく知りあうようになった。[13]」

また彼らは、それぞれの住まいが近かったという理由からだけでなく、各々の属する学園の代表として、ともに

「小単位」を組織して、「五四」運動に積極的に参加していった学生活動家としても、[14]単なる面識を越えておたがいに強く結ばれていた。[15]そのような結びつきの中で、鄭振鐸は、俄文専修館にあってロシア文学に親しんでいた瞿秋白、耿済之などの感化を受け、ロシア文学を通して、文学への関心を持つに至る。あるいは逆に、そのような文学を通した結びつきが、彼らの間の関係を一層親密にしたと考えてもよい。[16]

「我々はその頃（「五四」運動の時期――芦田注）、ある共通の趣味を持ちはじめた、すなわち文学をやることである。我々は特にロシア文学に対して深い愛着を持ったのである。秋白、済之は俄文専修館で学んでいた。その学校で使っているロシア語教科書は、プーシキン、トルストイ、ツルゲーネフ、チェーホフ等の作品だった。済之がたまたまトルストイの短編小説を一二篇翻訳すると、みんなはそれらをとても喜んだ。しかし当時、彼らはロシア文学の発展史について疎く、トルストイやその他の作家の生涯・伝記についてもほとんど知らなかった。〝俄専〟ではそのような教課は教えなかったからである。／私は彼ら二人の影響を受けて、自分でもロシアの作家たちの小説・戯曲をさがして読もうとした。私はロシア語が読めなかったので、英訳のロシアの作品を読むしかなかった。北京では、当時公立の図書館、あるいは個人でこの種の書籍を持っているところはほとんどなかった。うまい具合いに、ある日、私は孔君と顔見知りになった。彼は青年会の学習幹事をやっていて、私に青年会に遊びに来るように招待してくれたのである。そこで、私は二つのガラス戸棚を目にした。その戸棚には、英語の小説、戯曲、詩歌がぎっしりと詰っていて、特に英訳のトルストイ、ツルゲーネフ、チェーホフ、ゴーリキーなどのようなロシアの作家の作品が一つの戸棚いっぱい並んでいた。私は喜んで、早速手だてを考え、そこから幾冊かを借りて貪るように読んだ。[17]」

ここで「青年会」という言葉が見えるが、これは一九一三年十一月に結成された「基督教青年會」のことである。「五四」運動のあと、一九一九年十一月、鄭振鐸らはこの「基督教青年會」に属する「北京社會實進會」の名で、『新社會』という青年向けの旬刊雑誌を発行する。「北京社會實進會」[18]は「北京の学生界を連合して、『社会服務』に従事し、風俗の改良を実行する」[19]ことを「宗旨」とする、いわば社会福祉活動をめざす組織で、『新社會』発刊に際して、「編輯部」が新たに設置され、この雑誌が事実上「北京社會實進會」の機関誌になった。

『新社會』は、「(一)社会服務を提唱する／(二)社会問題を討論する／(三)社会学説を紹介する／(四)平民教育を研究する／(五)社会事情を記載する／(六)社会欠陥を批評する／(七)社会の実際情況を記述する／(八)本会の消息を報告する」[20]という「宗旨」に関わる著作の掲載をめざし、具体的には社会改造、労働問題、婦人解放問題等々のテーマを扱った評論が主であった。この雑誌の編集は、「北京社會實進會」の「編輯部」が行い、その部長は耿済之、部員が瞿世英、鄭振鐸、瞿秋白、許地山の四人だった[21]。ただ、実際に雑誌の発行を実現するという点では、評論の執筆はもとより、原稿の収集、印刷所との接触、校正など、もっぱら鄭振鐸にひとり負うところが大だったようである[22]。それはともかく、この『新社會』という雑誌の発行を可能にしたものは、やはり、「五四」という時代の背景と、彼らの「五四」運動の熱い経験、その中でのおたがいの強い結びつきであったことは疑いない。それは、『新社會』に掲載された評論の内容からも伺われる。

『新社會』は、一九一九年十一月から一九二〇年五月まで、あわせて十九号を発行し、最後の第十九号「労動號三」は、段祺瑞政府の弾圧発禁を受けたという。

『新社會』が第十九号で発禁停刊を余儀なくされたあと、それから三ケ月後の、二〇年八月、またも同じく「北京

社會實進會」の名で、鄭振鐸らは『人道』という月刊雑誌を刊行する。しかし、雑誌の出版経費問題などから、この『人道』は創刊第一号のみの発行にとどまり、そのあと二十年の末にむけて、このグループの中で、文学研究会の結成への企図が次第に脹らんでいくことになる。

ところで『新社會』の内容は、全体的に社会改造問題、労働問題等を取り上げた評論、ないしは「随感録」などが主調ではあるが、中に文学関係の作品、翻訳が皆無というわけではない。特に前掲の鄭振鐸の回想で触れられている、彼らの間でロシア文学に対する関心は、耿済之のトルストイ、チェーホフ、ツルゲーネフの翻訳掲載にそれを裏付けることができよう。[23] が、それらの作品を、彼らの純文学的関心そのものの表れと即断することはさし控えたい。なぜなら、それらは社会改造という課題に直結した作品の選択傾向がかなり強いからであり、そのことは『新社會』の「宗旨」からすれば、ごく当然のこともある。

鄭振鐸に関して言えば、『新社會』には、「新文藝」なる欄に「我是少年」（第一号、一九一九、十一、一）、および「燈光」（同第二号、一九一九、十一、十一）の二篇の口語自由詩を載せている。彼の文学に対する関心の発露は、すでにこの時期に創作の詩という形でここにも伺われる。今、参考までにその「我是少年」なる詩を見ておきたい。

「（一）　ぼくは若者！　ぼくは若者！
　　ぼくには炬火のような眼があり、
　　ぼくには泉のような思想がある。
　　ぼくには犠牲の精神があり、
　　ぼくには捨てられぬ自由がある。

ぼくは偶像のような歳月を過ごすのはいやだ、
ぼくは奴隷の安逸を見るのはいやだ。
ぼくは起つ！　ぼくは起つ！
ぼくはあらゆる権威を打破したい。

（二）ぼくは若者！　ぼくは若者！
ぼくには沸騰する熱血と活発進取の気象がある。
ぼくは前進したい！　前進！　前進！
ぼくには同胞の情感があり、
ぼくには博愛の心根がある。
ぼくは前方の光明を望み、
ぼくは波を蹴立てる大船を操り、
憐れな同胞を満載して、
前進！　前進！　前進したい！
濁浪が空を押しやり、疾風が荒れ狂ったとしても、
ぼくはただ光明のありかに向かって、前進、前進、前進だ！」[24]

この「我是少年」という鄭振鐸の詩は、「新文藝」と銘打たれてはいるが、これも純粋の文学作品というよりも、『新社會』発刊に際して彼の決意とでもいうべきものを詩という形式で高らかに歌い上げたもので、いわば「宣言」

的な性格の作品創作である。『新社會』第二号の「燈光」なる詩もほぼ同様と見たい。この二篇の他はすべて社会改造に関わる評論、ないしは「随感録」であり、また特にロシア文学に関わる評論、翻訳の類は、鄭振鐸本人については、『新社會』には見出せない。

鄭振鐸のロシア文学に関連する評論で最も早いものとしては、一九二〇年三月二十日に執筆され、同年七月、新中國雑誌社から出版された『俄羅斯名家短編小説集』に収められた「序」があり、また「俄羅斯文學底特質與其略史」(『新學報』第二号、一九二〇、六、一)、「寫實主義時代之俄羅斯文學」(『新中國』第二巻第七、八期、一九二〇、七、八)などがある。この内、「俄羅斯文學底特質與其略史」は参見できず、内容を確認することができないが、『新社會』に携わっていた時期に、鄭振鐸自身では、すでにロシア文学への関心が大きく脹らみつつあったことは、これらの評論が存在することからも明らかであろう。

『新社會』のあと、『人道』を発刊し、それが創刊第一号で停刊した頃の時期について、鄭振鐸は次のように回想している。

「我々はその頃、ロシア文学の翻訳に対して強い興味をもちはじめた。秋白、済之、さらには何人もの俄文専修館の学生が、翻訳の仕事に加わった。私もチェーホフやアンドレーエフの作品をいくつか訳したが、それらはいずれも英文からの重訳だった。同時に、ちっぽけな緑色のカバーの家庭叢書の中の〝ロシア文学〟のような、英文あるいは英訳のロシア文学史も読み、それは我々の懐中の宝になった。秋白たちがトルストイ、ツルゲーネフ、ゴーリキーの小説や、プーシキン、レールモントフの詩、クルイロフの童話などを翻訳し、その中で作家に関する紹介が必要だったりすると、私がそのちっぽけな本の中から抄訳した。私は当時日本にいた田漢同志に手紙を

書いて、ロシア文学史をいくつか紹介してくれるように彼に希望した。[25]」

このように、文学研究会の結成へ到る過程で、鄭振鐸が外国の近代文学としてはロシア文学を通して文学に接近していることは、茅盾もまたそれに近い過程を歩んでいる事実を合わせ考えると興味深い。文学研究会結成以降の、ゴーリキー、コロレンコ、ソログープ、クルイロフ、アンドレーエフの作品、あるいはロープシンの「蒼ざめた馬」（原訳表題「灰色馬」）、アルツバーシェフの「サーニン」（同「沙寧」）などの翻訳（いずれも英文からの重訳）、さらに「俄國文學史略」の連載など、ロシア文学に関わる鄭振鐸の一連の営為[26]は、それが彼の文学関心の大きな柱としていささかも衰えていないことを示している。ロシア文学との出合いが彼の文学関心を開花させる契機のひとつになっていることは明らかであり、ここでは、鄭振鐸が『新社會』に携わっていた時期に、彼がロシア文学をどのようなものとして受けとめていたかを示すものとして、「『俄羅斯名家短篇小説集』序」（一九二〇、三、三、二十執筆）を見ておきたい。

『俄羅斯名家短篇小説集』は、沈穎、耿匡（耿済之）などの訳で、プーシキン、ゴーゴリ、ゲルツェン、ツルゲーネフ、ピーセムスキー、レスコフ、スタンケーヴィチ等の作品九篇を収め、さらに各作家の「小伝」を加えて（この「小伝」は、右の引用の記載と重ねて考えると、鄭振鐸が執筆している可能性がある）、一九二〇年七月、新中國雑誌社から、その「第一集」として出版されたものである。この巻頭に収められた「序」で、鄭振鐸は、中国の文学界に、現在ロシア文学が盛んに翻訳紹介されていることに対して、「極めて楽観している」と述べた上で、その理由を五点挙げている。それはロシア文学の特徴の指摘であると同時に、中国の新文学の課題の提起になっている。

「……ロシアの文学は近代の世界文学の結晶である。現在ロシア文学を紹介することができれば、ぼくらは世界

の、近代の文学の真価を目にすることができるため、中国の新文学の創造もその基礎を確立できる。第二に、ぼくら中国の文学は、最も〝真〟の精神を欠いており、それらは形式にこだわり、雕琢に達者であって、文字の面に精力を費やすことしか知らず、文学は思想、感情の表現であることを忘れている。したがってそれらは何の価値もない。ロシアの文学はそうではない。それはひたすら〝真〟という字を骨格にしており、それは感情の、直感の表現であり、それは国民の性格、社会情況の真実の描写である。その精神は赤裸裸で、飾らず、形にとらわれずに文字の中に表現する。したがってその感覚は読者の感覚と相通じ、極めて大きな効果を収めることができる。現在ぼくらがそれを紹介できれば、自己の古さを捨て去る一方、新文学を打立てることができるだろう。第三に、ロシアの文学は人の文学であり、人生に切実に関わる文学であり、人間の個性が表現されている文学である。しかし、中国の文学は、まったく逆に、非人間の文学であり、人生に切実に関わらない文学であり、個性を表現できない文学である。ぼくらが文学の益を受け――あるいはまたその害を受け――ることができない原因は、大半がこのためである。現在ロシア文学を紹介することができれば、この非人間の、人生に切実に関わらない、個性を表現できない文学を取除き、ロシア文学と同様の一つの新文学を創造することができるかもしれない。これも極めて有益なことである。第四に、ロシアの文学は平民の文学であり、ぼくらのように、聖人を讃え、詩文のやりとりをしたり、士太夫の賞翫吟詠に供するほかは、平民との関わりはほとんど持たぬということはない。したがって現在それを紹介し、ぼくらの病体を治すことが、実際に必要である。第五に、ぼくらの文学は、長い間〝団円主義〟の支配に災いされ、ほとんどすべての小説詩歌が、みな千編一律に、それを模範として崇め奉った。そして悲劇の文学はそのためにほとんど出現せず、文学の真価を示すことは、永遠にできなくなってしまっ

た！　しかしロシアの文学は、ひとり悲痛の描写に長じ、多くの痛苦の声は、この迷信を打破し、ぼくらが文学の真価を見つけだすように導いてくれる。これもぼくらの文学界の前途と極めて大きな関わりをもっている。……」[27]

ところで、『俄羅斯名家短篇小説集』には、鄭振鐸の「序」だけでなく、同時に瞿秋白の「序」も収められている。今、この二人の「序」を較べてみたい。

「ロシア文学の研究が、中国ではすでに全盛期を迎えているかのようである。なぜなのか？　その主要な原因は、つまり、ロシアのボルシェビキの赤色革命が、政治的、経済的、社会的に極めて大きな変動を生みだし、天地を覆すように、全世界の思想がその影響を受けたからである。皆がその遠因を遡り、その文化を考察しようとしたので、知らず知らずのうちに、全世界の視線はロシアに集まり、ロシアの文学に集まった。そして中国のかくも暗黒悲惨な社会においては、人々は生活の現状の中に一条の新しい道を切り開こうとし、ロシア旧社会が崩壊する濤声を聞いて、それはまさに空谷の跫音さながらに、思わず心を動かされたのである。そのため、みなロシアを研究討論しようとした。そこでロシア文学が中国の文学者の目標になった。／　ロシアの国民性は本来極端であり、非妥協的であって、数十年前、国内の思想変化の激烈さは一段と凄まじかった。各国の革命運動の前には、どこでも思想の変化というものが確実に生まれるが、ロシアのような激烈さは従来あったためしがなく、だからこそロシアは君主制という国家から、一躍社会主義の国家に成りえたのである。それはロシア文学の中で目にすることができる。しかし、文学は社会の反映にすぎず、文学者は社会の代弁者でしかない。社会の変動によって、しかる後に思想に影響し、思想の変化によって、しかる後に社会に影響するということはない。なぜなら社会の

不安、人生の痛苦が、悲観の文学を生みだすからであり、たとえれば、人は悲しみのために涙を流すのであって、文学者の筆は人間の情感が宿る場なのである。……（中略）……中国の現在の社会はきわめて不安であることはもちろんだが、仮にぼくらが改造の必要ありと感じないなら、もともと相手にしなくてもよい。ぼくらが改造しなければだめだと感じるなら、いつどこでも新文学の発見が可能であろう。ぼくらは社会を改造するために新文学を創造するのではなくて、社会がぼくらにやむなく新文学を創造させるのである。とすれば、ぼくらが新文学を創造する材料はもとより必ずしもロシア文学に限ることはない。しかし、ロシアの国情は中国と類似したところが多いので、やはり紹介すべきである。……」(28)

この二篇の「序」を並べてみると、彼ら二人のロシア文学に対する関心の持ち方に、かなり色合いを異にした質的な違いのあることがより明瞭になる。

瞿秋白は、言い回しこそ慎重ではあるが、いわば中国の社会改造という課題に直結させてロシア文学の価値をとらえている。彼のロシア文学に対する関心は、中国社会の現状と共通する、ロシア社会の変動とそれにともなう思想の変化、または革命を可能にした国民性などが反映されたその内容である。

これに対して鄭振鐸は、まず社会改造という課題に関わらせてロシア文学を受け止めるのではなく、ロシア文学がもっているいわば文学そのもののあり方の問題に注目していると言えよう。彼は、中国の文学に欠けているもの、新しい文学のあり方に不可欠な要素を持ったものとして、ロシア近代文学をとらえており、ロシア文学の「リアリズム」（精神）、その人道主義（的思想内容）、平民性などに深い関心と共感を寄せていることがわかる（なお、ここの第三の「ロシアの文学は人の文学である」という主張は、明らかに周作人の「人的文学」を承けたものであり、また

第四の「ロシアの文学は、平民の文学である」という論点もおそらく陳独秀の「文学革命論」を念頭においたものと推測され、鄭振鐸のロシア文学への関心が、『新青年』の影響を直接承けているとも言えるが、それは「影響」というよりも、「新文化運動」時期の同時代人として、そのようなロシア文学についての認識をごく自然に分けもっていたとも考えられる)。

瞿秋白とは色合いを異にした鄭振鐸のロシア文学へのこのような関心は、文学研究会結成に向かう彼が、最初に出逢った近代文学のひとつとして、「文学」それ自体に目を向ける大きな契機のひとつになっているのではないかと推測される。鄭振鐸と瞿秋白という、「五四」から『新社會』へ、そして『人道』へと、共に肩を並べて社会改造の課題に鋭い論陣を張ってきた二人の青年の、同じロシア文学に対する関心の相違は、その後それぞれが歩むことになる互いに異なった分野とでもいうべきものを、すでにそこに内包するものであった。

## 三

ところで、文学研究会の結成を契機に、鄭振鐸は『小説月報』『文學旬刊』などの誌上で、多岐の分野にわたる評論の執筆、また精力的な翻訳などを通して、先に触れたロシア文学も含めて、文学上の仕事を数多く手懸けているが、その中でロシア文学に対する関心とは別に実はもうひとつ、それに勝るとも劣らない深さと強度を持った、ある文学者とその文学への傾倒があることに気づく。それが何かを具体的に提示することは、もう少し後回しにして、再度『新社會』から『人道』に到る経緯について追ってみたい。

鄭振鐸はこう記している。

「このような雑誌（『新社會』――芦田注）は、むろんまもなく支配者である軍閥の注目を引き、取締りを受けることになった。警察局は責任者の孔君を捕え、何カ月も勾留した。『新社會』はそれで停刊になってしまった。しかし我々は非常に憤慨し、徹底的に闘い、青年会を極力説得して、引き続き雑誌を出版しようとした。秋白が最も積極的な闘争精神を示した。孔君が出獄になった時には、我々はすでにひとつの〝月刊〟を出版して、誌名を『人道』とする、執筆者と編集者はやはり『新社會』と同じとする、という話をまとめていたが、執筆態度と観点においては、かなり進歩が見られた。／だが、我々が『新社會』旬刊と『人道』月刊を編集する際に、編集の過程で論争がなかったわけではなく、秋白は当時すでにマルクス主義者に傾いており、すべての社会問題をひとつの全体として見ていた。我々その他の人間は、しばしば孤立的に問題を見、濃厚な唯心論の傾向を有していた。さらに彼の議論は〝過激〟であると感じるものもあった。私は朦朧とした社会主義への信頼を持ってはいたが、読む本は無政府主義の著作が多く、そのために彼らの影響を受け、しかも〝人道主義〟などというものを主張した。『新社會』旬刊が発禁になったあと、ひとつの〝月刊〟を出版しようと討論した際、私は『人道』月刊と命名するように主張した。秋白はその時、その名称に不賛成を表明した。彼の見解は正確であり、はっきりしていた。だが、彼は別の名称をもち出さなかったので、みんなも私の意見に賛成し、そのまま『人道』という名称に決まった。／『人道』月刊は、第一期しか出版されなかった。第二期は編集も済み、しかも〝目次〟の予告も出されていた。だが青年会側は、様々な拒否の口実、主として経費がなくなったという言い訳を持ち出して、そのままあっさり停刊になってしまった。」(29)

その同じ時期のことについて、瞿秋白もまた、次のように言及している。

「私は菊農（瞿世英――芦田注）、振鐸、済之等の同志と『新社會』旬刊を組織した。かくして私の思想ははじめて社会生活と接触した。そして学生運動の中で受けとった社会的教訓は、私に〝社会〟の意味をハッキリ知らせてくれた。社会主義の討論は、いつも私たちの間に無限の興味を引きおこした。だが結局ロシアの十九世紀四十年代の青年の思想と似て、漠然とした皮相であり、カーテンの窓をとおして朝霧を見ていて、社会主義の流派も、社会主義の意味もみな混乱したまま、あまりハッキリしてはいなかった……（中略）……だが中国政府は、つまり旧派の死にかかった死神は、〝外国製品〟の――〝社会〟という二字を見ると、びっくりして頭にきて眼がくらみ、一概に〝過激派〟、〝ボルセヴィク〟、〝洪水猛獣〟と認めた、――そして私たちの『新社會』は警察署から封禁された。これも一種の奇異な現象で、社会思想の変態である。一方では極端に前進し、一方では極端に落伍していた。／その後北京の青年の思想は、次第に変って行って、主として哲学の方面、人生観の方面に向った。これはまたロシアの新思想運動での煩悶時代に似ていたが、〝煩悶とは結局何であるのか？　分らない〟のであった。そのころ私たちは月刊『人道』(Humanite)を組織した。『人道』は『新社會』の傾向とはもう〝かなりちがっていた。――社会問題の唯心的な解決を求めようとした。鄭振鐸の傾向がいちばんハッキリしていて、私の議論は問題とするに足りなかった。唯物史観の意味はどのみち当時は誰も分っていなかった。『人道』が生まれてから間もなく、私は中国を離れて、餓えの郷に入り、苦しみの人生観に立って、わが〝内なる要求〟を満足さすことを求めたのである。」（増田渉訳による）[30]

ここでは、どちらにも『人道』の「唯心」的傾向なるものが指摘されており、また瞿秋白は、「社会問題の唯心的

な解決を求めようとした」「傾向がいちばんハッキリしてい」たのは、鄭振鐸であったとまで言いきっている。

ところでこの『人道』における「唯心」的傾向とは、そもそもいかなるものだったのか。[31] これは鄭振鐸が『人道』第一号に載せた「人道主義」と題する文章を見れば、あるいはその実態が具体的に明らかになるのかも知れない。しかし残念ながら『人道』は今日参見することができない。したがってそれはさしあたり、鄭振鐸が執筆したとされる『人道』の「宣言」から推し量るしかない。

比較する上で、同じく鄭振鐸が執筆した『新社會』の「發刊詞」から見ておきたい。

「ぼくらの改造の目的はなにか？　ぼくらはいかなる方向に向かって改造を加えるのか？　ぼくらはデモクラシーという方向に向かって、中国の旧社会を改造する。ぼくらの改造の目的は、デモクラシーの新社会――自由平等で、一切の階級、一切の戦争のない平和で、幸福な新社会を創造することである。／ぼくらの改造の手段――態度と方法――はなにか？　／ぼくらの改造の方法は、下に向いた――大多数の下層の平民の生活、思想、習俗の改造――ものであり、漸進的――教育の普及による平和的な改造運動――であり、着実――彼らの解放の心理を啓発しつつ、彼らの知識を増進し、彼らの道徳観念を向上させる――なものである。／ぼくらの改造の態度は、研究的――社会科学の原理に基づき、世界的な改造の経験を参考にする――であり、徹底的――的確に旧社会の欠点を叙述批評し、あいまいな新旧調和論はなさない――であり、慎重――一切の社会状況を実地に調査し、ありもしないことを発言したり、闇雲にあてずっぽうの矢を放たない――であり、誠実――博愛の精神、誠実な言論を感化の具にする――なものである。概括して言えば、ぼくらの改造の目的と手段は／旧社会の欠点を考察し、平和的、実践的方法で、改造運動に携わり、デモクラシーの新社会を実現することである。[32]」

この「發刊詞」は、その冒頭「中国旧社会の暗黒は極点に達している！　それが改造されるべきことは誰でも知っている！　しかし、ぼくらはいかなる方向に向かって改造しなければならないのか？　改造の目的は何か？　ぼくらはどのように改造しなければならないか？　改造の方法と態度はいかようか？　これらはいずれも改造の先決問題であり、改造を主張するものはハッキリと解答しないわけにはいかない」の後を承けて、社会改造の目的、方法、態度を、彼らなりに具体的に歌いあげたものである。それは直截明確といおうか、それでいて極めて鮮明な主知的視点に貫かれ、「五四」の運動のあと、まだその興奮が覚めやらぬ青年学生の一途な対社会的姿勢を、くどくどした理由づけなしに、高らかに言い切ったものとなっており、いわば「五四」の迸る情熱と、そのデモクラシー精神の発露を感じさせる「宣言」文となっている。

つぎに、問題の『人道』の「宣言」を見てみよう。これは署名は「本社同人」であるが、前掲「發刊詞」からちょうど一年を置いて、同じ鄭振鐸によって執筆されたものである。(33)

この「宣言」はかなりの長文であり、冒頭「『易経』の『人ノ道ヲ立テルヲ仁ト義トイウ』という言葉は、吾人に三つの問いを投げかけてくる、すなわち、なぜことさら人のために〝道〟を立てる必要があるのか？　なぜ仁と義とが人の道とされなくてはならないのか？　仁義の観念はなぜ早くから先民の脳裏に刻まれていたのか？　この三つの問いは、もともと難解な〝隠語〟ではなく、ぼくらが人道の極致を研究する必要から、まずこれらを出して、述べてみようとするものである」で始まり、さらに「弱肉強食」の「畜道」に言及して、今日いまだ「畜道」が横行している中で、「人道」の必要性を以下のように説く。

「人の世界の発端も畜道を歩んだ。未開の太古史上、いわゆる原人時代の光景をぼくらはみな知っている。当時

の人類は禽獣の肉を食べ、また人肉を食べた。このような恐ろしいことについても、ぼくらは彼らを責めることはできない。なぜなら彼らが目覚める時期が到来していなかったからである。数十万年を経て、人の社会がだんだんと形成されてきた。人類は〝自然〟の教訓によって、お互い同士が殺し合うのはよいことではなく、互いに認め合う道理を共同でうち立てて、みんながそれを守って行かねばならないことを知った。人類はそのような互いに認め合う道理をみずから手に入れたあと、ことのほか急速に進歩した。現在の社会はぼくらを充分に満足させるものではないが、以前と比較すれば、はるかに欠点の少ないものであると感じる。このように見てくると、人のために〝道〟を立てるということは、人類の畜道から離れようという要求であり、人の世界では、どうしても欠かせないことである。／　互いに認め合う道理として、なぜ仁と義が必要なのか？　ぼくらはたぶんこう言ってよいであろう：仁は主観であり、義は客観である；仁は人を愛することであり、義は己にうち克つことである；一切の道理はこの二字の中に包括できる、と。ぼくらは人性を持っている以上、仁たり得る、なぜなら仁は固有のものだからである。巣居の時代、母親たるものは、自分の子供のために小さな巣をこしらえた。彼女は巣づくりに追われ、はじめは他の鳥類となんらの違いもなかったが、ただ子供に対する彼女の愛情が他の動物よりもより深く、より持続的であっただけである。このより深く、より持続的な愛情がとりもなおさず仁である。……（中略）……このような愛情は誰が彼女に教えたのか？　彼女の子供が他の動物に殺されてしまえば、彼女はむしろ苦しみを受けるのが減り、たくさんの責任を引き受けなくてもすむのに、どうして一途に守ろうとするのか？　彼女には〝忍びない〟という人性があるからである。彼女は自分の子供が苦しむのを目の当たりにするのは忍びないのである。だからむしろ自分の安楽をほっておこうとする。このような犠牲的精神は人が彼女に教え

たものではなく、固有のものなのである。ぼくらはこれこそが人道を成立させる基礎であると言うことができる。／　社会が大きくなればなるほど、たくさんの事柄が人を刺激し、人を耐えきれなくさせる。この時いわゆる固有の仁はほとんど戦いの血のなかに埋没し、逆に畜道に到るが如き趨勢である。だが人の世界はけっしてそのことで再びかの竜の世界、魚の世界の轍を踏むことはしない。その理由は〝義〟という准縄（水もりと墨縄――芦田注）がそれをしっかりと繋ぎとめているからである。〝義〟は薫染によってもたらされる。『己達セント欲シテ人ヲ達シ、己立タント欲シテ人ヲ立ツ』、『己ノ欲セザルトコロ、人ニ施スコト勿レ』、『己ノ欲スル所ハ、コレヲ以テ人ニ施ス』、これらの言葉は人は孤独な生活をすることはできず、あらゆる事は他人と一端の同情を共有しなければ成り立たないことを表している。いわゆる同情とは、社会生活の経験の中から産みだされた良き結果である。人類は同情によって、ますます義の必要性を感じるのである。ぼくらの内側には忍びないという本性が隠されていて、外側には同情の行為が表れる。そのため、人類の進歩には望みがある。だから人道とはとりもなおさず仁義の実践であると、ぼくらは直言することができる。……（中略）……／　現在の世界において、一切の事業の進行はまだ畜道を踏襲する傾向を持っている。いわゆる〝人道〟！　〝人道〟！は、まるで空谷の反響のようである。こっちで叫ぶとあっちでちょっと反響する、叫びおわり、反響がおわった後は、やはり人道の所在はみつからないのである。ぼくら数人の同志は、この本当の、妥当で正大な人道を探し求める必要を感じつつ、他方現在の社会に適合したお互いが共にやっていく方法を探そうとしており、また以上の二つの面で、記載されたもの、報告されたものが必要であると考えている。研究と実行は一人の仕事ではなく、みんなの相互援助があってはじめてできる。それゆえ、『人道月刊』の発行がぼくらの頭の中で十全に計画された。ぼくらがこの月刊を

発行するのは、指導者としての地位を占めたいからではなく、一般人の覚醒を懇ろに促したいためである。[34]」

以下「宣言」は、『人道』を発行する「因縁」（理由）を五点にわたって挙げている。それは要約すれば、民主主義精神の発揮、社会に対する批評あるいは勧告の立場の確立、大衆の置かれた生活状況の実態の調査、教育の平等の鼓吹、非人道的な風俗習慣に対する大衆への啓蒙などである。[35]

「宣言」の中に記された『人道』発行の「因縁」を見るかぎり、その社会改造に関する具体的主張は『新社會』のそれをほぼ継承したものと言ってもよい。但し「宣言」では、それらが「人道主義」という思想的基調に裏打ちされて導かれる構造になっており、「人道」、すなわち、人を愛するという「仁」と、自己にうち克つという「義」を内容とした「人性」を、「畜道」の横行する社会に対置することによって、自分たちのめざす社会改造の思想的原理としている、ことがわかる。

『新社會』が段祺瑞政府に弾圧された後、スポンサーである「社會實進會」が動揺しつつあった中で、彼らが中国古来の思想的概念である「仁」と「義」を借りて「人道主義」を掲げ、激化する弾圧を回避して、なんとか雑誌の発行を継続しようとする意図を貫こうとしたとしても、それは不思議ではないし、また唐突でもない。なぜなら、『新社會』の時期にも、鄭振鐸のグループによって、すでに「人道」についての言及が見えるからである。[36] ともかくも『新社會』から『人道』への経緯は、その構成メンバーの、社会改造についての根拠となる思想的認識の変化（あるいは『新社會』の際にはそれがはっきりしていなかったものが、『人道』の段階で、「人道主義」という形で、ともかくも根拠になる一つの思想的認識を持った、と言ってよいのかも知れない）が底流にあったことは明らかであり、それはこの「宣言」からも確認することはできる。それは同一の筆者による、この「發刊詞」と「宣言」を読みくらべてみ

ると、一方は、いわば外に向かう鋭い対社会的姿勢が、簡明直裁に押し出され、他方、社会的課題に立ち向かう思想的裏づけとしてではあるが、「畜性」に対置された人間の知性という側面を重要視する、さらに言えば、人間の精神の重視という、いわばベクトルとしては、内面に向かう発想の萌芽をそこに見ることができる。鄭振鐸、瞿秋白がともに指摘する『人道』の「濃厚な唯心論的傾向」、「社会問題の唯心的解決を求めた」とは、言ってみれば、瞿秋白にとっては、それが社会改造の「戦線」からの離脱につながる否定的傾向に映ったとしても、鄭振鐸にしてみれば、もっぱら人間の内面、つまり精神とか、知性とか、思想などをうみだす主体としての、個別の人間そのものにその関心が注がれていくという傾向を指すのではないかと思われる。このことに注目したいのは、以上のような「傾向」が、もっぱら対社会問題に旺盛な姿勢を示していた鄭振鐸を、個別の「文学」という分野でのその追求へと向かわせるひとつの背景になっているのではないかと推測されるからである。

そのようないわば「転換期」にあった鄭振鐸が、この『人道』に、インドの詩人タゴールの詩集『ギタンジャリ』（原表題「太戈爾的〝偈檀伽利〟（Gitanjali）詩集」）の翻訳を載せている。[37] これは、まさにその時点における彼の文学関心を端的に示すものとしてとらえることはできないであろうか？

## 四

鄭振鐸は文学研究会結成以後も、『小説月報』に頻繁にタゴール詩の翻訳を載せ、また彼が『小説月報』の編集に携わるようになってから、二度にわたって同誌のタゴール特集号を組み、彼自身もタゴールの人とその芸術について

の紹介、評論の筆を振っている。また、タゴールの詩歌の翻訳を単行本で何冊か出版し、それらの中の幾つかは解放後においても刊行されている。それらの事実を見ると、このタゴール文学への彼の執着ともいうべきものは、先に触れたロシア文学へのそれと並んで、否それよりもはるかに彼の内心の志向にねざした強い、一貫したものではないかと推測されるのである。

鄭振鐸がタゴールの詩の翻訳を『人道』に載せていることに、敢えてこだわってみたいのは、この『人道』の発刊をめぐって、瞿秋白と鄭振鐸らの間に「人道主義」の理解について見解の相違が生じたこと、また雑誌発行のスポンサーである「社會實進會」が経費の面で手を引くという実際的な問題以外に、やはり瞿秋白と鄭振鐸らの間の、社会的問題についての考え方の違いが顕在化したことによって、『人道』が事実上創刊号のみで停刊せざるをえなかったこと、さらに『新社會』では精力的ともいうべく、もっぱら社会問題、労働問題などに鋭い論陣を張っていた鄭振鐸が、この『人道』を境にして、否『人道』の事実上の分解直後に、後に文学研究会となって実を結ぶところの、純粋に文学を対象とする組織の結成にむかって奔走しはじめること、等々の事実ないしは経過が平行するからである。その意味で『人道』の時期は、鄭振鐸のグループにとって一つの「転換期」にあったと言ってよい。その『人道』にタゴールの詩が載っている。

タゴール（1861—1941）は周知のように、詩、戯曲、小説、紀行などあらゆる文学ジャンルで活躍したインドの文学者であり、特にその本領は抒情詩で、美と愛を高らかに唱いつづけた詩人として、一九一三年には英訳詩集『ギタンジャリ』によって、ノーベル文学賞を受賞した。また、文学と並んで宗教、哲学、思想の分野でも独特の見解を含む数多くの著作を著している。ノーベル賞受賞以降積極的に世界各地を訪れ、そこでのナショナリズムの立場からの

発言と行動も、世界的な注視の中にあった。因みにタゴールの最初の来日は一九一六年五月であり、中国を訪れたのは、一九二四年四月である。

鄭振鐸はタゴール文学との出逢いについて、一九二三年に次のように記している。

「タゴール（R. Tagore）の詩に対して、ぼくが最初に強い興味を覚えたのは、初めて『新月集』を読んだ時だった。それは今から五年近く前のことになる。許地山君が我が家の客間で、長い髪を両肩まで垂らし、黄昏の微光の中極めて神秘的に、ぼくにタゴールのことを語った。彼は、自分はビルマにいた頃、タゴールの肖像画を見、また誰かが彼について話してくれたのを聞いて、すぐ彼の詩集を買って読んだ、と言った。何日かして、ぼくは許地山君の宿舎に行った。彼は『タゴールの詩選を一冊きみに進呈しよう』と言って、書架にその詩集をさがしにいった。ぼくは窓の前に立っていた、あたりはひっそりと静まりかえり、池の噴水のさらさらという音がきこえるだけだった。ぼくは静寂のなかでかの麗しき本を待った。彼はほどなく書架から一冊の極めて小さな緑色の表紙の本を取り出してきた。彼は『これは日本人が選んだタゴールの詩だ、まずきみがもって帰って読んでみたまえ。タゴールは最近日本を訪れたんだ。』と言った。ぼくは車で帰ったが、帰路、新月と街灯の微かな光をたよりに、ざっとひととおりページをめくってみた。ぼくが最も気に入ったのは、その中程に選ばれていた何首かの『新月集』の詩だった。その夜、灯火の下でもう一度読んだ。あくる日、地山はぼくにあうと、『きみのいちばん好きなのはどの詩かな？』と聞いてきたので、ぼくは『「新月集」の何首かだ』と答えた。何日かたって、彼はまた一冊の奇麗な本をぼくにもってきてくれた。彼は『これが「新月集」だよ』と言った。それ以後、『新月集』がいつもぼくの机の上にあった。現在でも、ぼくはやはりしばしばそれをめくって読む。／　ぼくが『新

月集』を翻訳したのも、地山君の励ましを受けてである。ある日、彼は自分が訳した『ギタンジャリ（Gitanjali）』の何首かの詩を私に見せてくれたが、すべて古文で訳されていた。ぼくは『いい訳だ、でもなんだか古めかしすぎるようだ』と言うと、彼は『こういう詩は、古めかしい文体で訳さなければだめなんだ。だが「新月集」は、新しさ麗しさが流露する文章で訳す必要があるね。ぼくは「ギタンジャリ」を訳そうと思っているが、きみはなぜ「新月集」を翻訳しないのかね？』と言った。そこでぼくは彼と約束をして、ぼくらは同時にこの二冊の本の翻訳にとりかかった。その後二年たって、彼の『ギタンジャリ』の訳は無論まだ未完であり、ぼくの『新月集』も時として訳したり、やめたりだった。『小説月報』が改革されて、ぼくはやっと自分が訳した『新月集』をそこに何首か発表した。……」[38]

右の記載から、鄭振鐸とタゴール文学との出遇いは、一九一九年前後、やはり『新社會』の頃、鄭振鐸のグループの一人である許地山の話がその契機になっていることがわかる。ここで彼が触れている『新月集』の鄭振鐸訳単行本は、一九二三年九月、商務印書館から「文學研究會叢書」の「太戈爾詩選二」として出版されている（それ以前にも、一九二二年十月、彼は同じく商務印書館から「太戈爾詩選一」として『飛鳥集』[39]をすでに単行出版している）。また『小説月報』に発表した『新月集』の訳とは、第十二巻第一号の「雑譯太戈爾 Rabindranath Tagore詩」、および同第四号の「雑譯太戈爾詩（續第一號）」を指すものであろう。

文学研究会が結成されて、その機関誌として刷新された『小説月報』の最初の号に、鄭振鐸が載せたのがタゴールの詩の翻訳だったことは、彼の当時の文学関心が主に那辺にあるかを端的に示していると言える。文学研究会結成後、鄭振鐸のタゴール文学に対する関心は、堰を切ったように、各期刊への評論、翻訳、紹介記事掲載など、あるいは単

行本の出版というかたちで、いわば我々がはっきりと目に見える姿をとっていくが、当然それは文学研究会結成以前、つまり『新社會』から『人道』の過程と平行して、触発され、脹らみつつあったと考えることが自然であろう。現在までのところ、その最初の表れとしてとらえることができるのが、『人道』の『ギタンジャリ』の翻訳である。

とすれば、その時期、つまり『人道』発刊時期の、鄭振鐸のタゴール文学に対する関心の内容はいかなるものだったのか。ここにまずタゴールの『ギタンジャリ』の詩そのものを参考までにいくつか見ておきたい。

「我的朋友、你是在這個雷雨之夜、動身上你的愛的旅行麼？　空中如失意的人一樣、隆隆的呻吟。／　我的今天晚上、一些沒有睡着。時時開着門向黑暗中張望、我的朋友！　／　我看不見一些東西在我的面前。我奇怪什麼地方有你的道路。／　從什麼黑如墨水的河的陰慘之岸、從什麼蹙額縐眉的森林的遙遠之邊界、或從什麼幽暗的迷路之深處、你引延你的道路、向我走來我的朋友？」

（「友よ、こんな嵐の夜にも、あなたは愛の旅路を急いでいるのか。空は　絶望した者のように呻いている。／　今宵　わたしは眠れない。友よ、いくたびもわたしは　扉を開けては　闇をうかがう。／　目の前になにひとつ見えない。あなたの径は　どこにあるのか！／　墨を流したような川の　暗い岸辺のどのあたりを通って、陰鬱な森の　遠いはずれのどのあたりを通って、暗闇の迷路の　どんな深みを通って、あなたは　わたしのもとへと辿って来るのか、おお、友よ！」（『ギタンジャリ』二十三　森本達雄訳による、以下同）

「你沒有聽見他的寂靜的足音麼？　他走來、走來、永遠走來。／　每瞬間、每時代、每日、每夜、他走來、走來、永遠地走來。／　我以心的許許多多模式、唱了許許多多樂歌、但是他們所有的樂音、只是說、『他走來、走來、

永遠地走來。』／　在四月晴朗、香氣馥郁的時候、他由綠陰中的小徑走來、走來、永遠地走來。／　在七月之夜陰雨憂鬱的時候、他在雷聲轟轟的雲車裏、走來、走來永遠地走來。／　在憂思不展、愁情重疊裏、他的足步踏過我心上；這是他足的『金化力』(Golden touch) 使我的快樂重復照耀。」

(「あのかたの静かな足音を　聞いたことはないのか？　／　あのかたは来る、ひたひたと　いつも来る。／　どんな瞬間にも　どんな時代にも　夜ごと日ごとに　あのかたは来る、ひたひたと　いつも来る。／　わたしはさまざまな気分で　さまざまな歌をうたってきたが、歌の調べは　いつとても　みんなこのように告げていた――あのかたは来る、ひたひたと　いつも来る、と。／　陽の降りそそぐ四月の花の香る日に、森の径を通って、あのかたは来る、ひたひたと　いつも来る。／　雨の降りしきる七月の暗闇に、雷鳴とどろく雲の馬車に乗って、あのかたは来る、ひたひたと　いつも来る。／　悲しみにつぐ悲しみのなかで、わたしの胸に迫り来るのは　あのかたの足音、そしてわたしの歓びを燦然とかがやかせるのは　あのかたの御足の金色の感触。」〔『ギタンジャリ』四十五〕)

「呵、我的生命的主、我能每日面對地站在你前麼？　啊、一切世界的主、我能合掌地面對面地站在你前麼？　／　在你的孤獨沈寂的偉大的天空底下我能以謙卑之心面對面站在你前麼？　／　在你的爲苦作及競爭所騷亂的勞動的世界裏、我能於匆忙的人羣中、面對面地站在你前麼？　／　當我在這世界上的工作完結時、呵、王中之王、我能單獨地、無言地、面對面地站在你前麼？」

(「来る日も来る日も、おお、わが生命の主よ、わたしは　あなたの御前に　あなたと向かい合って立ち

ましょう。掌を合わせ、おお、もろもろの世界の主よ、わたしは　あなたの御前に　あなたと向かい合って立ちましょう。／　あなたの大いなる空のもと、ただひとり　黙って、心つつましやかに、あなたの御前に　あなたと向かい合って立ちましょう。／　労苦と闘争で騒然とした　この辛いあなたの世界で、忙しい群衆にまじって、わたしは　あなたの御前に　あなたと向かい合って立ちましょう。／　そして　この世でのわたしの仕事が終わるとき、おお、王たちのなかの王よ、ひとり　言葉もなく、わたしは　あなたの御前に　あなたと向かい合って立ちましょう。」〔『ギタンジャリ』七十六〕

「在我的生命裏、永久以我的詩歌尋求你。他們導我自此家至彼家、因他們、我乃見我自己、乃尋求並接觸我的世界。／　我的詩歌教我一切我所曾學的功課、他們示我祕密之路徑、他們帶了許多星光到我的眼前、在我心的水平線上。／　他們終日導我到苦樂之國的神祕裏去、最後在暮色裏、我行程已終的時候、他們又導我到那一個宮門裏去呢？」

（「生涯　片時も休まず、わたしは　歌をもって　あなたを探し求めてきました。戸口から戸口へと　わたしを導きさすらわせたのは　歌でした。そして、歌をもって自分の周りをまさぐり、わたしの世界を求め、世界に触れたのでした。／　わたしが学んだ人生の教訓を　すべて　教えてくれたのも　歌でした。歌は　わたしに秘密の小道を指し示し、わたしの心の地平線上に　数々の星を見せてくれました。／　歌は　ひがな一日　喜びと苦しみの国の神秘へと　わたしを導き、そしてついに、日暮れてわたしの旅路の果てに、なんという宮殿の門へ　わたしは連れてこられたのでしょう。」〔『ギタンジャリ』一〇一〕）

「我在衆人中誇口、說我是知道你的。他們在我的一切著作裏、看見了你的影像。他們走來問我、『他是誰？』我不知道怎樣回答他們。我說、『我實在不能說出』。他們責備我、輕蔑地走去。你微笑地坐在這裏。／　我把你的故事、置於永久不滅的歌裏。祕密自我心中湧出。他們來問我、『告訴我你的一切命意』。我不知道怎樣回答他們。我說、『呵、誰知道他們的命意所在！』他們微笑、極輕蔑地走去。你微笑地坐在這裏。」

（「わたしは　みんなのなかで　あなたを知っていると自慢した。人びとは　わたしのすべての作品に　あなたの姿を垣間見る。人びとは　わたしのところに来てたずねる――『彼って　どんな人？』わたしは　なんと答えてよいかわからない。わたしは言う――『じつは、口では言えないんだ』と。人びとはわたしを非難し、蔑んで去って行く。それでもあなたは　微笑みながら　そこに坐っていらっしゃる。／　わたしは　あなたの話を　失せることなき歌にした。秘めた思いが　わたしの胸から迸り出た。人びとはわたしのところに来てたずねる――『おまえの歌の意味を　すっかり　話しておくれ。』わたしは　なんと答えてよいかわからない。わたしは言う――『ああ、誰に歌の意味などわかるものか！』と。人びとは　笑い、蔑み切って去って行く。それでもあなたは　微笑みながら　そこに坐っていらっしゃる。」（『ギタンジャリ』一〇二）[40]）

『人道』に鄭振鐸が載せたタゴールの詩が『ギタンジャリ』のどの詩なのかは、当該雑誌が参見不可能なので、特定することはできない。但し、右掲の詩句は、英訳本であわせて一〇三首もある『ギタンジャリ』に収められた詩歌

の中から、決して恣意的に選んだのではない。鄭振鐸は、『小説月報』第十四巻第九号（一九二三、九）に「『吉檀迦利』選譯」を載せているが、右に提示したものはそこに取り上げられている作品の一部の原訳文とそれに対応する邦訳である。[41] そして実は、この「『吉檀伽利』選譯」の末尾には、「――一九二〇年、七月、舊譯――」なる記載があり、それによってこれらは『人道』発刊の一ケ月前に訳されたものであることが確認できる。とすれば、これらは『人道』掲載を目的として訳されたもの、あるいは『人道』に掲載されたそのものと考えてほぼ差し支えあるまい。これらによって、「転換期」にあった『人道』に、鄭振鐸が翻訳して載せたタゴールの詩『ギタンジャリ』の、全容とまではいかないにしても、その一端を伺うことはできよう。しかし、これらの詩はあくまでもタゴールの作品そのものであって、当然のことながらそれらは当時の鄭振鐸のタゴールに対する関心を直接語るものではない。彼のタゴール文学に対する関心を同時期的に述べている資料が今のところ見出せないので、ここでやや後の時点で、鄭振鐸がタゴールについて触れているものからそれを推しはかることにする。

## 五

一九二三年九月、『小説月報』第十四巻第九号は「太戈爾號（上）」を特集し、翌十月の同第十号もまた「太戈爾號（下）」として、両号ともに様々な分野にわたるタゴールに関する評論、タゴール自身の詩、小説の翻訳、またタゴールの著作、研究書の紹介記事などを満載している。因みに『小説月報』の編集は、その年の一月から鄭振鐸が担当している。

この『小説月報』の「太戈爾號」が特集されたのは、当初、その年の十月一日にタゴールが上海を訪れる計画がほぼ決まったことに呼応したものである（実際はタゴールの病気と寒冷な時節が考慮され、彼の来華は翌一九二四年四月に実現した）。『小説月報』「太戈爾號（上）」は、巻頭に鄭振鐸の「歓迎太戈爾」を載せて、彼の来華に熱い期待と歓迎を表明し、さらに「太戈爾傳」（同十号の「太戈爾傳（續）」で完結）を載せ、タゴールの伝記を詳細に紹介している。鄭振鐸はこの「太戈爾傳」で随所に彼の詩、哲学の特質について触れているので、まずそれから見てみたい。

「彼（タゴール――芦田注）は大哲学者であり、インドの精神的、愛国的領袖であり、歌人であり、劇作家であり、編集者であり、教育者であるが、それら一切を超えて彼は愛の詩人（The Poet of Love）である。愛情は彼の心の中、霊魂から溢れ出し、様々に変幻する。母の愛、子の愛、妻の愛、夫の愛、恋人の愛、愛国者の愛、自然の愛、神の愛、いずれもが彼の優美な詩歌の中で穏やかではあるがひたむきに唱われる。彼の歌声は天空にたゆたい、軽やかに人の心の琴線に触れ、深く彼らの心霊に繋がる。彼らは喜びに笑みを浮かべ、鼓動はほとんど停止し、目には涙珠をためる。」(42)

「彼の愛国の詩歌に秘むものは愛恋であり、鼓舞であり、犠牲の精神だが、そこにはいささかも憤怒、嫉妬、あるいは世界のいかなる人間を憎悪する暗示はない。これが彼と『鉄と血』を標榜するあらゆる急進的愛国者との違うところである。そのため多くの人が彼の主張に反対し、もっと激しい者はしばしば彼を罵る。……（中略）……しかし、彼を深く知る者は、彼をおおいに認め、神への愛と祖母への愛が彼の生命の中の二つの主要な特色であることを理解する。神は彼の永遠の伴侶であり、祖国は彼がしばしば思い遣る目的物である。ただ彼は決してインドの偏狭な国家主義者ではなく、世界の国家主義者――世界の人道主義者なのである。……」(43)

「タゴールが彼の詩歌と散文著作の中で表現している精神主義の理想は、すべてインド哲学の真理である。……（中略）……タゴールが彼の哲理詩の中で唱うもの、彼の『生の実現』という論文の中で述べることは、このウパニシャッドの哲学にほかならない。それは宇宙の一元化――現象世界の相違の中での根本的な一元化を述べる。ワーズワス（Wordsworth）は奇異な自然詩人である。彼の自然に対する精神は心暖かい、だが時としてあいまいである。彼の歌声は極めて優雅だが、唱われているのは、世界は憂愁によって造られ、『ぼくらの生は睡眠と失念にすぎない』、『獄房の陰影が成長した子供のからだにぴったりと覆いかぶさりはじめた』というような哀歌である。タゴールの哲学は彼と完全に違う。彼の見るところ、世界は快楽と愛に満ち、幸福が全宇宙の中を跳び舞っているのである。この世界にはなるほど憂愁は存在する。だが、それらはインドの秋空に浮かぶ雲のように、かえって明月の輝きを増すことができるのである。……（中略）……／　ウパニシャッドの中に、次のような言葉がある：『世界は愛の中から生まれ、世界は愛によって結ばれており、世界は愛にむかって動き、また愛の中に進入する』と。この真理は、タゴールが『行動の実現』の中で、さらに完璧に展開している。彼はその中で愛と正当な行動を鼓吹している。この愛と行動の使命には、ヨーロッパ各国が互いに破壊しあっていた際、わけても注目すべき点があった。ヨーロッパは長期にわたる戦争をおえてはいたが、彼ら国際間の敵視は依然としてすこしも取り除かれなかった。キリストの同胞の平和の理想は、すでに荒れ狂う西風の中に吹き飛ばされてしまった。嫉妬、猜疑、欺瞞は、王冠を頂いた彼らの悪魔だった。この時インドの哲学、タゴールの愛の哲学がヨーロッパ、ないしは世界全体に対して、実に極めて大きな使命をもったのである。あまりにも静寂な修養と深遠な思索にとらわれ過ぎた習俗はインドの光栄を暗澹とさせ、インドの尊厳は辱しめられた。だが同時に、極度に物質

崇拝主義の結果、西方諸国も深手を負った巨獣のように、咆吼し、苦しんでいる。この二つの極端な思想の調和は、理想の事実をもたらすことができる。タゴールの使命はすなわちそこにある。人間の永久平和と自由と発展はこの調和の中に存在するのである。」(44)

ここで鄭振鐸が述べているのは、タゴールの作品に示されるその「精神主義」、「人道主義」、そしてそれをささえる彼の「愛」の哲学、「調和」の哲学であり、主としてタゴールの哲学、思想という側面について、その特質が指摘されている。このようなタゴールの哲学的、思想的特質についても、それは鄭振鐸にとって、タゴールに対する関心、共感の具体的な内容のひとつになっていることは疑いない。そこから、これらを『人道』における「人道主義」、あるいは先に触れた『人道』の「唯心的傾向」という問題に重ねあわせて考察し、その関連を明らかにすることも、可能性としてありえなくはない。が、ここでは鄭振鐸とタゴールの哲学思想との関連を考察する方向はとらず、『人道』への『ギタンジャリ』掲載以来、文学研究会の結成を経て、『小説月報』に持続的にタゴール詩を載せ続ける鄭振鐸の内面のタゴール関心に光を当てるために、いま少し、彼がタゴールの文学、ないしはタゴールの文学観についてとりあげているものを見てみることにする。

「……ぼくらが歓迎するのは、すなわち愛と光と慰めと幸福をぼくらに与えてくれる人、すなわちぼくらの親愛なる兄弟であり、ぼくらの知識と霊魂における同行の旅伴である。／　世界でぼくらが歓迎するに値するのは、おそらくまず数十名に満たないであろう。タゴールこそ、この歓迎に値する最も少数の人間の中の最もぼくらが熱い心をもって歓迎すべき一人なのだ！／　彼はぼくらに愛と慰めと幸福を与え、灯火を提げて、ぼくらが暗黒の旅路を前進するのを導く、ぼくらの最も親しい兄弟であり、霊魂における最も密接なる同行の旅伴である。／

彼は荊棘生い茂る地球上に、ぼくらのために宏麗にして静寂なる詩という霊の楽園を築いた。この詩という霊の楽園は、日光のごとく至るところに存し、すべての階級、すべての人間を受け入れる。望むものは誰でも、歓迎されて自由にその中に入ることができるのだ。この霊の楽園には、多くの白衣の詩の天使が住んでいる。ぼくらが心楽しい時、彼女らはぼくらに唱和する、ぼくらが憂鬱な時、彼女らは優しくぼくらを慰めてくれる。……（中略）……ぼくらが懐疑すれば、彼女らはぼくらのために一条の確信の大道を指し示すことができ、ぼくが失望すれば、彼女らはぼくらのためにもう一度希望の炬火を燃え上がらせることができるのだ。つまり、ぼくらがいかにこの世界で虐げられ、圧迫されていようとも、ひとたびこの詩という霊の楽園を訪れるなら、心底に浸み入る慰めを受けないものはなく、死の灰の中から、再び火を灯された生命の青春の光を輝かさないものはいない。……（中略）……／　現在の世界は、まさに狭く暗い小部屋のようである。誰もが物質主義の黒い霧に覆われ、誰もがこの『現実』の小部屋にしっかりと閉じ込められている。この小部屋の中は恐るべき沈鬱、枯渇そして無聊である。中にいる人間は、自分の時間と力を費やし、自分の生命を費やして、銭金を計算し、互いに剝奪する策に思いをめぐらしながら、盲目者のように声高にまた密やかに言い争い、嘲罵しあうこと以外には、何も知らず、何らの生の幸福も享受していない。タゴールは最も偉大な発見者と同様に、これらの人間のために霊のアメリアを発見し、彼らに一層すばらしく麗しい人間の生活を指し示した。彼は、絢爛たるも純白な一筋の曙光がこの暗室の天窓の間から射込むように、彼らが互いに自分自身を見、自分たちの周囲の有様を見、すべての事物の内在する真相を見ることができるようにさせた。多くの人が長い間暗闇の中で生活していたが、この光を見て、こらえきれずに両眼を閉ざし、呪うことさえした。しかし大多数は敢えて目を開き周りを見回し、驚喜して狂わ

んばかりだった。この光は部屋の中の四周の美しい絵と宏麗な装飾を照らしだし、人間の内在する心を照らしだしたのである。／『光よ、わたしの光よ、世界に充満する光よ、目に口づけする光よ、心をやわらげる光よ！／『おお、いとしいものよ、光は躍る――わたしの生命のまんなかで。いとしいものよ、光は奏でる――わたしの愛の堅琴を。空は裂け、風は激しく吹きわたり、笑いながら大地を駆けめぐる』／――『ギタンジャリ』五十七。／彼は現在世界を理解し、人生を理解したのだ。[45]」

これは先に表題のみを掲げておいた、鄭振鐸の「歓迎太戈爾」の一節である。この文章は、彼を歓迎する詞であると同時に、彼の文学世界の紹介でもあり、さらにはそれが鄭振鐸のタゴールへの全幅の傾倒を通して語られている。

この「歓迎太戈爾」は、タゴールの来華を控えて、彼を歓迎するための「讃歌」という性格が濃厚な文章であることを考慮しなければならないが、この散文詩ともいえる文章から、鄭振鐸のタゴールへの深い敬慕を読みとると同時に、それが文学的には、タゴールの詩歌に表現された世界、すなわちタゴール詩という「魂の楽園」に啓示された「愛と光と慰めと幸福」の世界、あるいは詩というかたちによって照らしだされる「事物の内在する真相」「人間の内在する心」といったものへの彼の共感、傾倒であることがわかる。これら鄭振鐸のタゴール詩に対する表白は、彼のタゴール文学に対する関心のありようを探る手掛かりの一端にはなりえよう。

しかし、これら「太戈爾傳」「歓迎太戈爾」だけでは、タゴール文学に対する鄭振鐸の共感、関心の内容はまだいまひとつ不明である。

時期的に少し遡るが、一九二二年二月、『小説月報』第十三巻第二号に、鄭振鐸は「太戈爾的藝術觀」と題する一文を載せている。なおこの文章の執筆は文末の記載によれば一九二一年十二月二十日である。それはタゴールの芸術

観の紹介ではあるが、事実上タゴールの芸術観に対する鄭振鐸なりの関心を端的に表白したものと言える。

この「太戈爾的藝術觀」は、タゴールの『人格論』の第一章「芸術とは何か？」をいわば「材源」にして書かれたものである。[46] しかし、それは単に紹介のための全体、あるいは部分的翻訳ではなく、鄭振鐸による原著作の取捨選択を通しての再構成がそこに見られ、その点からも彼とタゴールの芸術との接点、ないしは彼のタゴールに対する芸術関心、タゴールを通して語られる彼の内心の文学認識、を理解するうえで看過できない内容を含んでいる。

「太戈爾的藝術觀」は、冒頭「ぼくらは多くの人に、芸術とは何か？　と尋ねる。最古の書籍の中で、彼らの議論はすでにまちまちで不確かである。現在でもやはり同じである。百人中ほぼ九十数人の回答は異なるのだ。芸術の役割に関して、とりわけ論争は最も烈しい。芸術は人生の要求に適合しなければならないと主張するものがあれば、芸術は芸術衝動に応じて生まれるもので、いかなる功利主義的支配も受け入れないと考えているものもある」で始まる。つまり、この文章の主旨は、芸術とは何かという問い、すなわち「芸術の本質」をタゴールの見解を借りて闡明しようとしたものである。鄭振鐸は「芸術の本質」を説くにあたって、まずタゴールの「人格的人間（Personal man）」という概念を重視する。

「タゴールは、この偉大な世界とのぼくらの関係は極めて複雑であると考える。腹を空かしては物を食べ、喉が渇いては水を飲み、ぼくらは物質上のあらゆる欲望によって大地と接触する。すべての事実を知れば、それを追求して簡単な法則の中に納めようとし、すでに起こったある変化を目にすれば、必ずそうなった原因を発見しようとし、ぼくらは知恵という面でのあらゆる欲望によって大地と関係が生じる。が、それ以外に、ぼくらにはさらに精神上の要求、人格的人間（Personal man）の要求がある。人格的人間は物質的人間とちょうど正反対の位

置に立つ。彼には自分の好悪があり、また彼はあるものを捜しだし、それによって自分の愛の要求を満足させることを考える。この人格的人間は、ぼくらがあらゆる欲望――肉体的な、および知識の上での――から逃れ出た時しか、見つけだすことはできない。[47]」

つづけて、鄭振鐸は科学と芸術の違いを述べ、芸術の世界とは、この「人格」の世界であると指摘する。

「科学の世界は真実の世界ではなく、力の抽象世界である。ぼくらは知恵の助けを借りて、それを利用することが可能だが、ぼくらの人格の助けを借りて、それを実現することはできない。芸術の世界は違う。ぼくらはそれを目にし、感じてそれに達することができるのだ。ぼくらは、ぼくらのもっている情緒によってそれに対処できる。この芸術の世界こそが人格の世界である。[48]」

さらに、彼は芸術の誕生の原因、芸術の存在理由を次のように論述する。

「タゴールはこれらの問題に対してきわめて詳細に回答している。彼は、人類が禽獣と異なるところは、禽獣では、必要の範囲以内に束縛されていて、それらの活動は自己保存の必要のためでなければ、種族保存のためであるところにある。言い換えれば、禽獣のすべての能力は生存競争の戦場に費やされる。が、人類は違う。人類は生命の商業世界ではあたかも大商人である。人類が取得する金銭は、自分が消費する金銭よりも多い。だから人類の生活においては、多くの過剰な富があり、自分のために自由に浪費する。禽獣もまた知識をもっており、自分たちの知識を用いて、自分自身の生命を保存擁護できる。が、禽獣はそこに止まってしまう。禽獣は自分たちのいる環境を知って、住を求め食を求め、かつ四季の寒暖を知る。人類もそれらの事柄を知らねばならない。なぜなら人類もまた生きねばならないからである。が、人類の知識はそのようなところに用いるほかに、まだ多く

の剰余がある。この剰余の知識を、人類は自由に用いることができ、知識のために知識を求めることができる。だから人類の科学と哲学が形成できたのである。／　同様に、芸術の誕生の起源もそのようなことである。人類と各種の動物は、いずれも自分らの快楽、あるいは快不快、恐怖、憤怒、あるいは愛情の感覚を表そうとする。動物の世界においては、このような情緒の表現は『使わなくてはならない』という範囲を越えると、止まってそれ以上進まない。が、人類は違う。人類の情緒の表現はやはりまだ『使わなくてはならない』という原意がその中に残されてはいるが、彼の情緒の枝葉は成長発展し、紺碧の空一面に広がる。言い換えれば、つまり人類の情緒の力は、自己保存の目的の必要から使う以外に、なお多くの剰余がある。この剰余の情緒がついに溢れて芸術の創作品になるのである。／　ぼくらの心の中にある感覚が生じた時、ぼくらに感覚を引き起こさせた対象に対処するほかに、全く対象に吸収されない余剰の情緒がなお存在し、そのためについにはぼくらの心に戻ってくる。その逆波でぼくらは自分自身を感じるのである。ぼくらが貧しい時には、ぼくらのあらゆる注意力はすべてぼくらの身体の外の衣食住に注がれる。ぼくらがもし富める者であるとしよう、とすれば、財貨の光線がかならず自分の心に反射し、ぼくらに自分は富める者だと感じさせるはずである。これこそが、あらゆる生物の中で人類だけが自省することができ、自分自身を知ることができる理由である。言い換えれば、他の生物に比べて、人類がずっと深く自分自身の人格を感じることができる理由は、人類の感情の力がその対象に消耗される以外になおずっと多くを出しているからである。だから芸術の中に人類が表現するものは自分自身であって、決して彼の対象ではない――彼の対象は完全に科学の中に表現されるのである。／……（中略）……およそ芸術の中に表現された対象は、すべて人類の感情の洗礼を経ており、すでに彼の人格とひとつに融合している。／　本来この世界は

ぼくらは関係がなく、――衣食を求め、知識を求める以外は――ぼくらの感情を持ち、それが愛であれ、憎しみであれ、喜びであれ、悲しみであれ、あるいは恐れや驚きであれ、持続してそれに対して感覚を働かせてこそ、この世界は始めてぼくらの人格の一部になるのである。ぼくらが成長すれば、それはぼくらと共に成長し、ぼくらが変遷すれば、それはぼくらと共に変遷する。ぼくらの情緒は、ちょうど溶液のようにこの外象の世界を溶かして、心暖まる知覚を持った世界にするのである。／　だから、赤裸々な事実の報告は文学ではない。なぜなら、事実はぼくらの情緒の外に独立しているからだ。ぼくらは言う。日は円い。水は流れる、火は熱いと。誰かなにか感覚を呼び起こされるであろうか？　だが、朝日が昇ったばかりの美しい景色の描写は、永遠の興趣と美感をぼくらの心の中に生じさせる。それは描写されたものが朝日それ自身ではなく、ぼくらの心中、眼中に感覚された朝日の景色だからである。換言すれば、それがぼくら自身の人格の表現ということである。／　芸術の主要な目的は人格の表現である。……」(49)

「芸術の描写は必ずしも詳細である必要はなく、その精神を摑まければならない。芸術家でないものが、一本の樹木を描写すると、必ずその木のあらゆる特徴を事細かに記そうとする。だが、それは芸術の描写ではない。真の芸術家の描写は、重要でない詳細な部分は無視し、主要な特性に注目する。彼は描写する対象の全体的な個性的精神を、宇宙の心の内から表現し、作者の人格化を経て、調和させ、情感を持たせるである。／　文学作品の中には、哲学的な抽象思想が含まれているもの――インド文学の中には、それがとても多い――もあるし、歴史上の事実を報告したものもある。しかし、いづれであろうと、このような文学の織布の中には、必ず作者の火のような情緒と鮮やかな人格の糸が織り込まれている。およそ芸術に、作者の人格化――感情化――を経ていない

ものが含まれているなら、芸術と称することはできない。なぜなら、芸術は人間の剰余の感情から生まれるものであり、そしてそれこそが人間の人格の表現だからである。」(50)

この中で比喩として述べられている部分はともかくとして、「芸術の中に人間が表現するものは自分自身であって、決して彼の対象ではない」「芸術の中に表現された対象は、すべて人間の感情の洗礼を経ており、すでに彼の人格とひとつに融合している」「赤裸裸な事実の報告は文学ではない。なぜなら、事実はぼくらの情緒の外に独立しているからだ」「作者の人格化――感情化――を経ていないものが含まれているなら、芸術と称することはできない」などの指摘に注目したい。これらは、前提としての「芸術は『人格』を表現するものである」「芸術の世界は『人格』の世界である」というタゴールの芸術観から導かれる極めて独特の見解であり、芸術が対象とするものよりも、対象をとらえる人間の精神・情緒・感情・感覚を、芸術存在のいわば本質であるとする認識である。これは当時、たとえば「写実主義」「新浪漫主義」等々というかたちで、文学がいかなる対象を、どのような手法でとらえるかが喧争されたなかにあっては、それとはきわめて異質の芸術認識だったのではないか。そして彼タゴールの実際の作品との関係でいえば、彼の本領とされるその抒情詩は、まさにそうした芸術認識と表裏一体の関係にある芸術作物として受けとめ得る、独特の内容と形式を備えもったものであること、これは、先に提示した『ギタンジャリ』を含めて、その詩をいくつか現にひもといてみれば、仮にタゴール文学にあまり馴染みのない者であっても、いともたやすく首肯できる。

この「太戈爾的藝術觀」は、たしかに鄭振鐸の独創の文学認識ではなく、その限りでは、タゴールの文学観の紹介にすぎないとも言える。しかし、事実上そのような芸術認識の産物であるタゴールの詩を、持続的に翻訳し、それらを『小説月報』その他に載せ、また単行本で刊行するという鄭振鐸の営為(51)をあわせ考えると、それはタゴールの見解

を踏襲しながらも、鄭振鐸みずからの文学観の表白にほぼ重なるものと見做してもさしつかえはあるまい。

## 六

このようなタゴール文学への傾倒を示す鄭振鐸の起点が、『人道』への『ギタンジャリ』の翻訳掲載であることを考えると、先に見た『人道』の「唯心」的傾向といったものの実際の側面がさらに明らかになってくる。いうところの「唯心」的傾向とは、先に「鄭振鐸にとっては、その関心がもっぱら人間の内面、つまり精神とか、知性とか、思想などをうみだす主体としての、個別の人間そのものに注がれていく傾向を指すのではないか」と述べておいたが、ここではさらに端的に、もっぱら「文学」を指向する傾向、と言い換えることができる。それは、彼のタゴール文学への傾倒を契機とした、人間の感覚、情緒、精神そのものに向けられる文学認識にうらづけられたものである。それは同時に彼にとって「文学の自覚」の発端になったものであった。それは単に文学がわかる、文学が好きだという覚醒を超えた、文学を自分自身と積極的に関わらせ、もっぱら文学の方法で社会と関わりを持ち、自身の人生の事業として文学を追求することまで含めての「自覚」の謂である。鄭振鐸が『新社會』から『人道』を経て、その直後から文学研究会の結成に奔走し始める経緯をみると、広い意味での社会思想、社会改造運動から、個別に「文学」そのものにより深く関わっていく[52]、近代文学の黎明期における文学青年のひとつの軌跡を読み取ることができる。その大きなバネとして働いているのが、鄭振鐸にとってはタゴール文学であったと考えられるのである。

『人道』発刊の際、その「唯心」性に反発して、鄭振鐸と意見が相違した瞿秋白は、その直後に『晨報』の記者と

してモスクワに赴き、のちにコミュニストとして、やはり広い意味で社会思想、社会改革運動から、個別に「政治」そのものへと自らを鋭く関わらせていく。これもまた、鄭振鐸とは対極的ではあるが、文学青年のひとつの軌跡といえよう。いずれにしても、同じロシア文学から文学に関心を持った二人が、『人道』における意見の相違の根底にあったものをバネにして、後のそれぞれの生き方を貫く結果になっていることを考えると、先に見たロシア文学に対する二人の関心の相違は極めて暗示的とも言える。

一九二〇年十月十六日、瞿秋白は、愈頌華、李仲武とともに、北京をたってモスクワへ赴く。瞿秋白らを北京で見送ったのは、耿済之、鄭振鐸、瞿世英、郭紹虞、郭夢良、郭叔奇など、『新社會』から『人道』の仲間たちであった。鄭振鐸のグループで、後に文学研究会の発起人の一人になった瞿世英（菊農――瞿秋白の叔父）が彼らに送別の詩を寄せているが、それは一九二〇年十月二十五日付『晨報』に掲載されている（もちろん瞿秋白の『餓郷紀程』にもそれは引用されている）。その詩の中にも、瞿世英を通してではあるが、鄭振鐸のグループのタゴールへの傾倒を匂わせる表現が見え、彼らの間では少なくともタゴールがひとつの共通の関心になっていたことがうかがわれる。(53)

「　頌華、仲武二兄および秋白のロシアに赴くを送る　　菊農

ふりかえってみると、
悲惨な生活、重苦しい社会。
君たちはついに行ってしまう！　行くのもよい、行くのもよい。
ただ向こうではたしてどうなのかを見てほしい。

またふりかえってこちらがどうあるかを見てほしい。

★　★

君たちは蜜蜂になって、花を摘み、蜜をつくれ。
ただ往ったり来たり手紙の取りつぎだけの郵便配達にはなるな。

★　★

タゴールはいった、『世界のあらゆるものは変化する』と……
『変化がぼくらの秘密だ』。
ベルグソンはいった、『宇宙万物の歴程は創造だ、――時々刻々の創造だ』と。
ぼくらが再び逢える時、
どれほど変化し、どれほど創造しているかは分からない？

★　★

ぼくらは別れるが、
ぼくは深く信じる、やはり宇宙の調和、普遍的な精神生活の中で、
和諧――合一を……。

★　★

ぼくには何も気にかかることはない、
君たちはどうか？」(54)

この詩を、鄭振鐸のグループと瞿秋白の間の『人道』における意見の相違を暗に示したものなどと強弁するつもりは毛頭ない。詩の内容自体は、瞿秋白のモスクワ赴任を励まし、それぞれの生き方を認めあって、お互いが変化成長し、いつの日にか再会を誓ったものと言える。ただ、タゴールの言葉そのものを引いている部分はともかくとして、「宇宙の調和、普遍的な精神生活の中で、和諧――合一を」と言い回しは、タゴールの思想を示す表現と言え、彼らの間を風靡していたであろうタゴール熱を伺わせるに充分である。

鄭振鐸が瞿秋白を見送った一ヶ月後、一九二〇年十一月、鄭振鐸のグループ、とりわけその中でも鄭振鐸が最も積極的な推進役になって、文学研究会結成にむけての本格的な胎動が始まる。これは、彼が人生の事業として文学に関わろうとする姿勢を表したものであり、タゴールの詩『ギタンジャリ』の翻訳掲載に示される彼の「文学の自覚」の発端は、単なる「自覚」にとどまらず、それをさらに振らませ、結実させようとする追求へ向かう。その追求は、ロシア文学も含めて近代文学全体に対する、旺盛な、そして瑞々しい好奇心がバネになっていたとしても、人生の事業としての文学の追求にまで彼を駆り立てたのは、彼の内面のタゴール文学に対する強い傾倒ではなかったかと推察される。もし鄭振鐸自身にタゴール文学に対する心底からの強い傾倒がなかったとしたら、そのような追求はなされなかったであろうし、ひいては文学研究会は実を結ばなかった、と言うのはいささか過言であろうが。それから二ヶ月余りのち、文学研究会は正式に発足するが、最初の機関誌となった『小説月報』第十二巻第一号に、彼が「雑譯太戈爾詩」を載せていることは、その証であると同時に、以上の推論のひとつの根拠でもある。

文学研究会が発足して間もない、一九二一年二月二十七日付の『晨報』に、「太戈爾研究」と題して、瞿世英、鄭振鐸の二人の署名のある文章が掲載されている。これは、彼ら二人がタゴールの様々な著作、作品を読み、その中の

主要な思想、タゴールの人生観、世界観、芸術・詩歌に対する意見などを書簡の形式で論じようとしたものである。その「前書き」の部分に、次のような記載がある。

「ぼくら二人（瞿世英、鄭振鐸を指す――芦田）はタゴール（Rabidranath Tagore）を共に読み、およそ彼の英訳の――彼自身の訳、あるいは他人の訳――詩、戯曲、およびその他の作品は、すでにほとんど全部読み終えた。ぼくらは彼の優美と超越を深く感じている。彼はぼくらの痛苦を慰め、ぼくらの生の重荷を軽減してくれる。ぼくらの現在の煩悶の生活の中で、彼は確実に唯一の優しくかつ真心をもったぼくらの保母であり、ぼくらのひ弱な心の中に、彼の宏大で心温かい生の呼び声を浸透させ、知らず知らずのうちについに彼に呼応、共鳴しつつ、か細い、自然な生の呼び声――それが以下の通信である――を発してしまう。共感する読者が、もしぼくらと空谷の呼応をかわすことができるなら、ぼくらは極めて感謝するものである。十、二、二五。」(55)

先に、主として一九二〇年八月の『人道』第一号に掲載されたタゴール詩の翻訳という事実、一九二二年二月の『小説月報』第十三巻第二号に掲載された「太戈爾的藝術觀」の内容から、鄭振鐸が文学研究結成へ向けて、その追求のバネとして彼のタゴール文学への強い心酔、傾倒を推論したが、右の記載から、正に一九二一年一月の文学研究会の発足前後の時期においても（この「前書き」は一九二一年二月二十五日の執筆である）、鄭振鐸の文学関心のなかで、タゴール文学が極めて大きな比重を占めていたことがわかる。この「太戈爾研究」の本文冒頭には、瞿世英の言葉ではあるが、「ぼくらの文学研究会が成立したことは、煩悶の生活の中の喜ばしい出来事である。文学研究会の中にタゴール討論会が成立したことは、とりわけ喜ばしい出来事である。……」と述べられており、彼ら鄭振鐸のグループのタゴール熱は、文学研究会結成以後も引き継がれ、そのまま文学研究会に持ち込まれたことを示している。

その具体的な表れが、『小説月報』誌上に見られる、タゴールの文学、思想など多岐にわたる評論、あるいはタゴールの作品の翻訳掲載、そして「太戈爾號」の編集など、一連の営為である。

## 七

さて、一九二一年三月交通部鉄路管理専科学校を卒業した鄭振鐸は、同年五月十日に創刊された『文學旬刊』（当初は上海『時事新報』の副刊だったが、創刊一年を経た二二年五月十一日付の同第三十七期から、文学研究会が編輯を行う建て前をとり、正式に同会の定期出版物の一つになる）の主編に迎えられ、彼が一九二二年十二月謝六逸に引き継ぐまでその任を務めることになる。その創刊号に、鄭振鐸は〔本刊同人〕の署名で「宣言」を載せており、そこには彼の原理的な文学認識なるものが端的に表明されている。

「ぼくらは文学の重要性と能力を確信している。ぼくらは、文学は単にある時代、ある場所、もしくはある人間の反映であるだけでなく、時間と場所と人間を超えるものでもあり、しばしば時代の先を行き、人間と場所を改造する原動力になる。と考える。人々のあらゆる記録の中で、ただそれのみが人々の思想と感情、悲哀と喜楽、痛苦と憤怒、恋愛と怨恨をつぶさに、この上なく感動的で麗しい形式の中に、そっと伝達することができる。ただそれのみが力強く、時間と場所を異にした人々を作者と深く同化させ、心の中に作者の情感をもう一度生じさせることができ、作者が笑えば、自分も笑い、作者が涙を流せば、自分も涙を流し、作者が飄々として遠くを思えば、自分も飄々として遠くを思い、はては作者の微かな呻吟、わずかな顰感さえもが、彼らに微かな呻吟、顰

蹬を十分呼び起すことができるのである。／　人々の最高精神の結合、文学のみがそれを実現することができるのである。／　世界のどんな言語を話す人間でも、彼らには彼ら自身の文学があり、また同時に別の人々がこの上なく好む文学も存在する。つまり、自己の文学を他人にささげると同時に、また他人の文学を紹介して自己に与えているのである。世界文学の結合こそ、人々の最高精神の結合である。……」(56)

同じく『文學旬刊』第一号に、鄭振鐸は西諦の署名で「文學的定義」なる文章を載せている。その結論にあたる箇所で、彼は包括的に「文学は人々の情緒と最高思想を結合させた『想像』の『表現』であり、しかもそれ自身が永久の芸術的な価値と興味を具えたものである」と定義している。これは、文学と科学、絵画、彫刻、音楽などの芸術と文学の違いに注目して、導かれたものである。

「文学と科学が違う所以は次の点にある。（一）文学は情緒に訴え、科学は知恵に訴える。知恵には永久不変のものもある、しかし永遠に進歩せず、増減しないものはない。かつその大部分は極めて激しく変化するのである。……（中略）……文学が永遠の価値と興味を持っている所以は、すなわち人々の情緒が固定不変だからなのだ！／（二）文学の価値と興味は、それ自身に含まれており、科学の価値は書籍に含まれる真理に存し、書籍それ自体にはない。文学は一つの芸術である。このことは皆が知っていることだ。だから、文学の価値と興味は、単単に思想の高尚と情感の深微にあるだけでなく、思想と情緒を表現する文章の美しさと精巧さにある。科学の本は違う。その価値は本来真理に存し、文章は単にその中に含まれる真理を述べるために使われるにすぎない。……（中略）……文学と科学の異なるところは、この二点にある。ぼくらはここから、文学は情緒という要素をその内に帯びていなければならないことがわかる。どのような文学でも、情緒という要素を内に帯びていないもの

はない。この要素がなければそれは文学ではないのだ。……（中略）……／　が、文学が他の芸術と異なるところは、また数点ある。（一）文学は想像である。だから、それは絵画、彫刻などの芸術とは異なる。多くの人が文学は『討論』ではなく、『表現』であると考えているが、この言い方は極めて正しい。しかし、注意しなければならないのは、いわゆる『表現』とは、決して『描写』の『表現』ではなく、『想像』の『表現』なのである。『描写』の『表現』は、絵画、彫刻の仕事であるが、文学の仕事ではないのだ……（中略）……だから、文学作品に表現されるものは、描写ではなく、想像であり、作者の精神の洗礼を経過したものである。だから、文学作品の中に表現されるもの――人間の行動と風物――は彫刻や絵画などに比べて、ずっと感動的であり、その表現はずっと力強く、生き生きしている。それらが表現する美は、精神の美であって、物質の美はなく、表現する行動も理想化された行動であって、実際を模倣した行動ではない。／（二）文学は人々の思想と情緒を表現するものであって、単に情緒を表現するだけではない。だから、それは音楽とも異なるのである。音楽は完全に人々の情緒の表現である。……（中略）……文学は違う。それはいずれにしても、所詮純粋な情緒の表現たることはできない。それはいずれにしても、所詮多少の理性の要素を内に含まなければならない。たとえかの『純文学』と称されている詩歌であっても、理性の束縛から完全に離脱することはできない。社会の道徳的要求はやはり常時その中に浸透する。写実派や象徴派の作家のように、極めて多くのものが、もっぱら美しい文章で自己の最高の思想を表現している。[57]」

また、『文學旬刊』第五号（一九二一、六、二十）に、やはり西諦の署名で「文學的使命」と題する文章を書き、そこで鄭振鐸は、ハント（Hunt, T.W. 1844―?）の『文学原理及び問題』（『Literature: Its Principles and Pro-

blems』、Funk & Wagnalls Company, 1906, New York）における見解に拠りつつ、それを補って、「文学の真の使命」を「環境に対する個人の情緒感覚を表現して、作者の歓喜と憂鬱によって、読者に同様の感覚の喚起をはかること。または、高尚飄逸な情緒と理想によって、読者の乾からびた精神と野卑な実利的心境を慰めあるいは向上させること」と概括し、それをさらに簡略にして、「人々の同情と慰めを拡大あるいは深化させ、あわせて人々の精神を向上させる」[58]ことであると、原文中、この部分はいずれも活字を大きくして記している。これもまた先の「文學的定義」と同質の文学認識であることは明瞭である。

これらこそ、ほかでもない文学研究会発足時期における、鄭振鐸の文学そのものに対する基本的な認識と言うべきものであろう。すなわち、文学とは、時代や場所、あるいは個々の人間を超えて、その思想や感情、さらには喜怒哀楽というような人間にしかない様々な情緒を表現することを通して、人々の「最高精神」を結びつけるものであるという認識である。本稿の冒頭で、鄭振鐸の原理的な文学認識を茅盾のそれと対比して、両者の間に基本的な「差異」が存在するようだという「心証」を述べておいたが、その「差異」とは実はここにあるのではないか。つまり、茅盾の場合は、「文学は人生の反映」であるという原理的な文学認識から、「時代」「社会」に規定された「人生」を反映したものが文学であり、それは逆に、文学は「時代」「社会」に規定された「人生」を反映しなければならない、という把握をともない、文学が対象とする外の世界とそれをとらえる方法をもっぱら重視する。それに対して鄭振鐸は、内容的にも、形式的にも文学そのものが持つ特質、言い換えれば、人間のみに特有の精神的、情緒的営みを高度に表現するものとしての文学の特質という側面をもっぱら重視しており、少なくとも、文学研究会結成前後の彼ら二人の原理的文学認識に限れば、以上のような基本的、質的な「差異」が存在することは否定できない。鄭振鐸に関して言

えば、そのような文学認識が、タゴール文学に対する傾倒を通して、詩歌を主としたその作品世界と彼の芸術論を受容する中で形成されたものであることは、以上の立論から明らかであろう。

茅盾と鄭振鐸という、文学研究会の実質の形成に寄与した指導的文学者の文学認識における基本的「差異」は、その後のそれぞれの文学的営為にどのように貫かれたのか、またその「差異」は、同じ文学研究会という場において、文学の問題での決定的な違いとして拡大しなかったのか、あるいは拡大しなかったとして、ふたりが文学研究会という場で基本的に「合作」を可能にした要因はどこにあったのか、また鄭振鐸について言えば、タゴール文学と並んで、彼の文学関心の中にやはり大きな比重を占めているロシア文学があるが、ロシア文学とタゴール文学は彼の内部でどう関わっていたのか、など、検討すべき問題は山積している。が、それらの考察は改めて、別の機会に譲るとしたい。本稿では、文学研究会結成前後の鄭振鐸の文学観の実相と「位置」を解明するために、文学研究会の結成に実を結ぶ彼の「文学の自覚」への経緯を探り、その主たる契機になったタゴール文学の受容を析出するという所期の目的は達せられたと考え、ここにとりあえず擱筆する。

1　一九二〇年十二月一三日付『晨報』に「文學研究會宣言」、同じく十六日付「小説月報改革宣言」が公表されており、また十二月十七、十八日付『學燈』、さらに、十九、二十日付上海「民國日報」副刊『覚悟』にもそれと同じものが掲載され、文学研究会の存在は成立大会以前にすでに公けにされていた。その間会員の募集が進み、成立大会には二十一名が参加した。（「文學研究會會務報告第一次（Ⅱ）成立會記事」（『小説月報』第十二巻第二号所載）に拠る）。なお、この成立大会に参加した二十一名は、朱金順が「介紹〝文学研究会成立会撮影〟」（『新文学史料』一九八〇年第四期）で、当日来今雨軒前で撮影された記念写真（これは発起人の一人である瞿世英が、一九六一年十二月、北京師範大学中文系に寄贈したもの）にもとづいて、

二十名の氏名を特定している。

2　郭沫若『創造十年』、上海現代書局、一九三二、九初版。引用は、小野忍、丸山昇訳『黒猫・創造十年他　郭沫若自伝2』（「東洋文庫126」、一九六八、十一、平凡社）によった。なお、ここで「当時」というの、この文章の直前に、郭沫若が『『論文學的研究與介紹』と『論國内評壇及我對於創作上的態度』の二篇を書いて、正式に彼ら（文学研究会）と交戦した」とあるので、一九二二年七月から八月頃と考えられる。

3　茅盾の原理的文学認識については、拙稿「初期茅盾における原理的文学観獲得の契機　――そのロシア文学受容」（『東洋文化研究所紀要』第百一冊〔一九八六、十一、東京大学東洋文化研究所〕所載）を参照されたい。

4　『小説月報』第十二巻第一号に載った「文藝叢談」は全部で五則あるが、その内の〔二〕は茅盾の執筆（署名は雁冰）であり、〔三〕は署名がないが、おそらく内容からみて茅盾の執筆であろう。なお、鄭振鐸執筆の〔六〕は〔五〕のミスプリントであろう。

5　鄭振鐸「文藝叢談四」〔振鐸〕、『小説月報』第十二巻第一号（一九二一、一）所載。なお、著作表題のあとの〔　〕は実際の署名、以下同じとする。

6　鄭振鐸「文藝叢談六」〔振鐸〕、『小説月報』第十二巻第一号（一九二一、一）所載。なお、文中エマソン（1803―1882）はアメリカの思想家、詩人。ブルック（1832―1916）はイギリスの文学史家。ベネット（1867―1931）はイギリスの作家。

7　「文學研究會簡章」（『小説月報』第十二巻第一号所載）の第二条に「本會以研究介紹世界文學整理中國舊文學創造新文學爲宗旨」、第四条は「本會之事業分爲左列二種（甲）／研究　（1）組織読書會　（2）設立通信圖書館　／（乙）出版　（1）刊行會報　（2）編輯叢書　／　其他事業臨時酌定挙行」とあり、さらに「文學研究會讀書會簡章」（『小説月報』第十二巻第二号所載）の第二条には、「本會爲便於進行起見分爲右列二部若干組／　甲部　以國別暫分四組　／（1）中國文學組　（2）英國文學組　（3）俄國文學組　（4）日本文學組　／　乙部　以文學之種類別分爲四組　（1）小説組　（2）詩歌組　（3）

戯劇文學組　(4) 批評文學組　／　甲部遇必要時得增設組数」とある。

8　第一のグループは、鄭振鐸、耿済之、瞿世英、許地山、王統照。第二のグループは、周作人、朱希祖、郭紹虞、孫伏園、葉紹鈞。商務印書館に属するのは、沈雁冰（茅盾）および蔣百里。但し、これらはあくまでも便宜的な分類にすぎない。特に、新潮社の社員である葉紹鈞（『新潮』第一巻第三号〔一九一九、三〕所載の「本社特別啓事」による）、「研究系」と称される蔣百里などの位置は検討を要する。また郭紹虞については、彼の「〝文学研究会〟成立時的点滴回憶――悼念振鐸先生」（『文芸月報』第七十二号、一九五八、十二）に、「五四」以後北京で鄭振鐸と面識を持ち、鄭振鐸の紹介で、耿済之、許地山、王統照らと知りあい、さらに鄭振鐸に、葉紹鈞や茅盾と連絡をとるように紹介したという記載や、葉紹鈞の「《王統照文集》跋」（山東人民文学出版社版『王統照文集』第六巻所収、一九八二、八、二十五執筆）には、「一九二一年初文学研究会成立、十二発起人中有我（葉紹鈞――芦田注）、其他十一位中、我只認識郭紹虞、是幼年的熟朋友、還有剣三、振鐸、地山、世英、済之、雁冰和其他四位、我全不相認。是振鐸写来邀我作発起人的、其時才通過兩三回信、還没見面。」とある。いずれにしても、同会の誕生をその発起人の構成と関係という側面から解明する上で、その十二名の発起人がそれぞれどこで、どのような関係を持ち、どのような経緯から合流したのかを確定することは、まだ課題として残されている。

9　「文學研究會會務報告第一次　(I) 本會発起之經過」（『小説月報』第十二巻第二号、一九二一、二）による。

10　葉聖陶は「略叙文学研究会」（『文学評論』一九五九年第2期）で、「在宣言和会章后面署名為発起人的有十二人。到現在、永遠離開我們的有六位、他們是朱希祖、蔣百里、許地山、耿済之、鄭振鐸。其中鄭振鐸是最初的発起人、各方面聯絡接洽、他費力最多、成立会上、他当選為書記干事、以后一直由他經管会務」（傍線芦田）と記している。また、鄭振鐸「『中國文學論集』序」（一九三四、二、二〇執筆、一九三四年三月開明書店『中國文學論集』所収）には、「把自己的文章開始剪存了下来、是《小説月報》革新了以后的事、那時是民國九年。革新之議、發動耿済之先生和我。我們蔣百里先生處、遇見了高夢旦先生、説起了要出版一個文藝雑誌事。高先生很賛成。后張菊生先生也又談了一次話。此事乃定局。……」（傍線芦田）とあり、『小説

月報』革新の議、すなわち文学研究会結成の提案は、耿済之と自分（鄭振鐸）が「発動」したとしている。

11 「文學研究會會務報告第一次（Ⅱ）成立會紀事」（『小説月報』第十二巻第二号、一九二一、二）による。

12 王統照は、『新社會』第十三号に「賣餅人」という小説をただ一篇載せているだけで、『新社會』の仲間そのものではない。王統照は、一九一九年十一月北京で成立した「曙光」社の最初からのメンバーであり、雑誌『曙光』に数多く執筆している。この曙光社には、耿済之が一九一九年十二月に、鄭振鐸、瞿世英が一九二〇年に入って、加入している（「曙光雑誌社社員名単」〔張允侯、殷叙彝、洪清祥、王云開編『五四時期的社団』（三）所収〕による）。鄭振鐸は「悼王統照先生」（『人民文学』一九五八年1月号）で、王統照について「他在一九一九年五四運動的時候、就投身反帝反封建的斗争的最前線。那時他是中国大学的一个学生。他和几位同学一同編輯了《曙光》月刊、而瞿秋白、耿済之和我等、那時候也正在編着《新社会》旬刊。我們開始認識、並立即成為很好的朋友。」と記している。王統照は一九一八年に北京の中国大学英国文学系に入学し、彼も「五四」運動に参加している。あるいはその運動の中で鄭振鐸らと面識を持ち、耿済之、鄭振鐸、瞿世英を曙光社に引き入れたのかも知れない。

13 鄭振鐸「記瞿秋白同志早年的二三事」、『新観察』第十二期（一九五五、十二）。なお、鄭振鐸が瞿秋白について回想し、あわせて『新社會』、『人道』の時期に触れているものとしては、「回憶早年的瞿秋白」（『文匯報』、一九四九、七、十八）、「『中國文學論集』序」（一九三四年三月開明書店版『中國文學論集』所収）などがある。

14 鄭振鐸は、前掲「記瞿秋白同志早年的二三事」で、そのことについて、「我々何人かが代表したのは、すべて小単位で、かつそれらの単位の中で、活動を行うのはきわめて困難であり、大衆の意見は多様で、指導ができず、特に私はほとんど〝単独行動〟になってしまった。我々〝俄文専修館〟、〝匯文〟および〝鉄路管理〟を代表する一群が、一緒になって小単位を作れたのは、普段顔をあわせることが多く、比較的熟知している間がらだというのが主要な理由だった。だから、会議や活動の際も、しょっちゅう一緒だった。秋白は我々の中の主要な〝策士〟であり、学生会の場でも、彼の人並優れた雄弁によって、大きな

役割を果たし、我々の活動を正確で弾力性に富んだものにする上で、彼の指導の天才が発揮された。後になればなるほど、我々の活動はいよいよ困難になっていき、北京大学、北京高等師範学校では会議を開くすべもなくなり、しかたなく東城の城壁一帯に近い〝匯文〟で会議を行った。会議はいつも夜だった。こっそりと別々に入ってきては会議を開いた。散会後も一人ひとりこっそりと抜け出した。……」と記しており、また前掲「回憶早年的瞿秋白」では、「五四運動の際、我々は厄介なことは起こさなかった。〝趙家楼〟焼き打ちの一件は、我々は参加しなかった。しかし我々は自分たちの学校を代表して学生会に参加した。秋白と済之は俄文専修館の代表であり、世英は燕京大学の代表で、私は鉄路学校の代表である。我々は機会あるごとに逮捕される危険があった。会議の時間と場所はどちらも高度の秘密だった。秋白は一度道を歩いているところを私服に尾行され、もう少しで捕まるところだった。……」とある。

15 「『中國文學論集』序」（注13参照）では、「后青年會刊行《新社會》週刊、我以友人孔先生之介、（今孔先生墓木拱矣！）加入爲編輯。始和耿済之、瞿世英、許地山、瞿秋白諸先生相識。」とある。

16 前掲鄭振鐸「回憶早年的瞿秋白」に「当時、いつも一緒にいた友人たちは、耿済之、瞿世英、許地山、秋白と私であり、さらに済之の弟の式之など六七人だった。我々がみな東城に住んでいたためと、趣味の関係のために、我々はいつの間にかついにひとつのグループになっていた。我々は同じ学校で学んでいるのではなかったが、互いの交流は同窓生と比べるとずっと親密だった」とある。ここで「趣味の関係」とあるのは、次の本文の引用文（注17参照）からもわかるように、「文学」を指す。

17 前掲鄭振鐸「記瞿秋白同志早年的二三事」。なお、文中にいう「孔君」については、「『中國文學論集』序」の記載を含めて（注15参照）、それ以上には不明である。また「青年会」とのつながりについては、「回憶早年的瞿秋白」（注13参照）に「北平の青年会の事務所は東城にあった。私はしばしば事務所に行って本を読んだ。私は会員でも、ましては信者でもなかった。瞿秋白、耿済之らもよく行った。許地山と瞿世英は盔甲廠燕京大学で勉強していた関係から、青年会とのゆききは普段から頻繁だった。」とあるように、アメリカのメソジスト教会が設立した匯文大学（一九二〇年、この匯文大学その他が合併して燕京

大学と改称された）に籍のあった、キリスト教徒の許地山がその橋渡しをしたと考えられる。

18 「北京社會實進會」については、耿済之「『北京社會實進會』的沿革和組織」〔済〕（『新社會』第一号、一九一九、十一、一）、同「『北京社會實進會』的沿革和組織（續前）」〔済〕（同第二号、一九一九、十一、十一）、陳長衡「北京社會實進會本年夏令工作報告」（同第二号、一九一九、十一、二十一）、「社會實進會現在的職員與各部工作的現狀」（同第六号、一九一九、十二、二十一）、及び同七号以降の各号に載った「社會實進會消息」などによって、それを概観することができる。

19 耿済之「『北京社會實進會』的沿革和組織（續前）」〔済〕、『新社會』第二号（一九一九、十一、十一）。

20 「本刊簡章如左」、『新社會』第一号（一九一九、十一、一）所載。

21 「北京社會實進會消息」（『新社會』第八号、一九二〇、一、十一）に、「本會編輯部於九年一月一日、在西石槽鄭宅開編輯會議。由部長耿匡君主席。編輯員到者有瞿世英、鄭振鐸、瞿秋白及許地山諸者。首由瞿君世英介紹許君寸仝人——他是剛由瞿君介紹、經編輯會議全體通過的——繼討論新社會旬刊編輯事。……」とある。

22 前掲鄭振鐸「記瞿秋白同志早年的二三事」に、「那時青年会想出版一本専給青年閲讀的雑誌、約了我們幾個人做編輯。我們商量了幾天、決定出一個週刊、是八開本的十六頁、定名〝新社会〟。孔君負責任做經理、我負責集稿並校対。我跑印刷所、也經常跑到秋白、済之、地山、世英的家裡去取稿。……」とある。

23 耿済之が『新社會』に翻訳しているロシア文学に関わる作品は、「社會調査問題（俄國托爾斯泰著）」（耿匡訳）〔『新社會』第一、二号〕、「我們要怎麽辦呢？（俄國托爾斯泰著）」（耿匡訳）〔同第三～九号〕、「航海（俄國杜僅納甫 Tougeniev）」（耿済之訳）〔同第六号〕、「往前（譯自俄國 Plestcheet 原作）」（耿匡訳）〔同第八号〕、「唉、衆人！（俄國紫霍甫 Anton Tchehoff 著）」（耿済之訳）〔同第九～十二号〕がある。

24 鄭振鐸「我是少年」、『新社會』第一号（一九一九、十一、一）。

25 前掲鄭振鐸「記瞿秋白同志早年的二三事」。なお文中の「ちっぽけな緑色のカバーの家庭叢書の中の〝ロシア文学〟（像小小

的縁皮的家庭叢書裡的一本〝俄国文学〟」とは、バーリング（Baring. M）の『Outline of Russian Literature』（Home University Library, The London & Norwish Press）が考えられる。また、「回憶早年的瞿秋白」では、当時の鄭振鐸らがいかにロシア文学に魅かれていたかが次のように語られている：「青年会のちっぽけな図書館に、最もたくさん並んでいたのは、ロシア文学の名著の英訳本と社会学と社会問題に関する本だった。私とトルストイ、チェーホフ、ゴーリキーなど何人かの小説や戯曲との接触が始まった。そして秋白と済之も俄文専修館でちょうどトルストイやチェーホフを読んでいた。彼らはロシア語からトルストイの短篇小説の翻訳を始めたが、私は英訳本からチェーホフの戯曲を重訳した。我々は当時ロシア文学に対して、それほど熱っぽく魅かれ、崇拝していたのであり、それほど激しい翻訳介紹の情熱をもっていたのだ！　われわれが初めて手にした原稿料というのは、あれは全部ロシアの作品を訳した原稿料だったのだ。瞿秋白と耿済之は《托尔斯太短篇小説》を共訳して、共学社にわたし、商務印書館から出版した。これは初めての翻訳である。私が編んだ《俄国戯曲集》には、秋白、済之、私自身、さらにはたくさんの俄文専修館の同人たちが訳した戯曲が入っていて、それも共学社にわたし、まもなくやはり商務印書館から出版された」。ここの《俄国戯曲集》については注26参照。

26　▽「木筏之上／　俄國高爾該（Gorky）著」（『小説月報』第十二号、一九二一、二）▽「林語／　俄國克洛林科著」（同第十二号外、一九二一、九）▽「莫薩特與沙萊里（短劇）原名 "Mozart and Salieri"／　俄國普斯金（Pushkin）著」（同第十二巻号外、）▽「天鵝梭魚與螃蟹／　俄國克魯洛著」「箱子／　俄國克魯洛夫著」「平等／　俄國梭羅古勃（Sologub）」（同第十三巻第二号、一九二二、二）▽「你是誰？／　俄國 F. Sologub 著」（同第十三巻第三号、一九二二、三）▽「灰色馬／　俄國路卜洵作」（同第十三巻第七、八、十～十二号、一九二二、七～十二）▽「俄國文學史略」（同第十四巻第五～九号、一九二三、五～九）▽「沙寧／　俄國阿志巴綏夫（M. Artsybashev）著」〔西諦訳〕（同第十五巻第六号、第二十巻第一～十二号、一九二四、六、一九二九、一～十二）▽「紅笑（The Red Laugh）／　俄國安特列夫（L. Andreyev）著」（同第十五巻第七号、一九二四、七）▽「克魯洛夫的寓言／　俄國克魯洛夫（Krylov）著」〔西諦訳〕（同第十五巻第十一号、一九二四、十一）。

なお、ロシア文学関係の単行本としては、▽『六月』（史拉美克著）〔商務印書館、一九二一、四初版、「共學社俄羅斯文學叢書　俄國戯曲集10」〕▽『海鷗』（紫霍甫著）〔商務印書館、一九二一、四初版、「共學社俄羅斯文學叢書　俄國戯曲集6」〕▽▽『貧非罪』（阿史特洛夫斯基著）〔商務印書館、一九二四、一初版、「文學研究會叢書」〕▽『灰色馬』（路卜洵著）〔商務印書館、一九二四、一初版、「文學研究會叢書」〕▽『血痕』（阿志巴綏夫著）〔開明書店、一九二七、三初版、「文學週報社叢書」〕▽『沙寧』（阿志巴綏夫著）〔商務印書館、一九三〇、五初版、「文學研究會世界文學名著叢書」〕▽『俄國短編小説譯叢』〔鄭振鐸輯訳、商務印書館、一九三六、三初版、「文學研究會世界文學名著叢書」〕等がある。

27 鄭振鐸「『俄羅斯名家短篇小説集』序」、今、『鄭振鐸選集』上冊（福建人民出版社、一九八四、一）所収のものに拠った。

28 瞿秋白「『俄羅斯名家短篇小説集』序」、今、『瞿秋白文集』二（人民文学出版社、一九五三、十二）所収のものに拠った。

29 前掲鄭振鐸「記瞿秋白同志早年的二三事」。なお、文中、編集が済み、目次も予告されたという『人道』第二号は、「新村研究號」として発行される予定だったようである（中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局研究室編『五四時期刊介紹』第一集上冊〔生活・読書・新知三聯書店、一九七八、十一〕の『人道』の解説、三二八頁に拠る）。

30 瞿秋白『餓郷紀程』（商務印書館、一九二二、九初出、「文學研究會叢書」）第四章。引用は、増田渉訳「革命のモスクワへ——新ロシア遊記——」（『中国現代文学選集』第三巻〔一九六三、三、平凡社〕所収）に拠った。

31 鄭振鐸の「記瞿秋白同志早年的二三事」は、一九五五年に執筆の「回想録」であり、中華人民共和国成立以後、中国共産党員として瞿秋白の「権威」が確立された後に、しかももっぱら瞿秋白を中心的なテーマとして書かれた「回憶」であることを考慮しなければならない。したがって、こと思想的な評価に関する記述には、その記載そのものに一定の留保を加えた上で、書かれている事象の、その時点におけるより実際に即した位置づけが必要であろう。解放後に書かれた「記瞿秋白同志早年的二三事」は、当然瞿秋白の『餓郷紀程』を踏まえて（読んだ上で）書かれているであろうし、『餓郷紀程』さえ、『人道』の時期から三年余り後に単行出版されたものであり、かつ、一九二一年五月、瞿秋白が張太雷の紹介で党員候補になり、同年九月

ロシア共産党（ボ）に属する正規の共産党員になり、さらに、彼が一九二二年二月に中国共産党に正式に入党したのちに刊行された文章である。したがって、ここで両者とも指摘する『人道』の「唯心的傾向」なるものは、瞿秋白の側からのマルクス主義的な評価を多分に含んだ表現であり、鄭振鐸の側に、事実政治的・思想的な「唯心的傾向」があったとしても、彼が『人道』停刊後に、積極的に文学研究会結成へと奔走していく流れを踏まえて、その「唯心的傾向」なるものを、当時の彼に即して、その実態が「再現」、ないしは「再評価」されてしかるべきであろう。

32　鄭振鐸「發刊詞」〔振鐸〕、『新社會』第一号（一九一九、十一、一）。

33　「宣言」の署名「本社同人」が、鄭振鐸のものであることを示す本人の証言ないしは確実な根拠は、現在までのところない。しかし、『人道』の「執筆者と編輯者はやはり『新社会』とおなじ」で、「私は『人道』月刊と命名するように主張した」（鄭振鐸「記瞿秋白同志早年的二三事」）などの記載から、鄭振鐸の雑誌編集過程での位置を勘案すると、この「宣言」は鄭振鐸が代表して執筆した可能性は強い。なお、陳福康「鄭振鐸筆名、別名輯録箋注」（『新文学史料』一九八六年第一期、人民文学出版社）には、この「本社同人」は鄭振鐸の筆名としてとられ、「一九二〇年8月5日鄭振鐸等主編的《人道》月刊創刊。巻首《宣言》署此名」とあるが、やはり「根拠」は示されていない。

34　鄭振鐸「宣言」〔本社同人〕、『人道』第一号（一九二〇、八、五）。今、中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局研究室編『五四時期期刊介紹』第一集上冊（生活・読書・新知三聯書店、一九七八、十一）所収のものに拠った。

35　「宣言」中の『人道』発行の「因縁」を記した箇所を示しておく：「政治の権威が頻繁にぼくらを圧迫し、ぼくらの思想、行為、および生命はいずれもその支配を受けている。……（中略）……ぼくらの憐れむべきおおぜいの政権を握っている者はやはり〝武力の乱用〟、〝残忍な刑罰〟などを対外内治の第一の義諦にしている。ゆえに懇ろな忠告をおこないあわせて民主主義（原文「民本主義」――芦田注）の真の精神を発揮せざるをえない」、「富者は金銭の魔力で社会を左右している。……（中略）……ぼくらは、富者の中に本当に慈善を好む者が一人もいないとは敢えて言わない、しかしそういう人間はきわめて少な

い。ぼくらは彼らを目覚めさせ、社会に対する真の同情を彼らに表明させる必要がある。だから、批評あるいは勧告の位置に身を置きたい」、「ぼくらが通りへ出ると、ある等級の人間が通行人のあとに着いて、日を経たほこりまみれの痩せこけた手を伸ばし、『旦那さま？　うんとこさ御恵みを！』、『慈悲深い旦那さま奥さま、私を憐れんでくださいませ！』と言っているのが目に入る。……（中略）……ぼくらは彼らのためになにか方法を考え、彼らにちゃんとした生活をさせるべきである。ぼくらが予防と救済という二つの面で手を打つとすれば、彼らの生活状況を調査し、彼らが身を立てる方法を紹介する必要がある」、「無知と知恵とは本来対立することがらではなく、ただあるものは教育を受ける機会に恵まれ、あるものは教育を受ける機会が無かったからにすぎない。……（中略）……だから、人々にみな教育を受ける機会を持たせ、人々が自分たちに相応しい生活ができるように、ぼくらは教育の平等を鼓吹する」、「ぼくらの立ち居振舞は、時に風俗習慣の束縛を受ける。そのためぼくらの精神上、肉体上の能力が損なわれる。ぼくらは地域的な風俗習慣は本来〝一定不変〟のものではなく、もし変えるとすれば、それも人道を根拠におこなう必要がある。例えば、インドの婦人が自分の子女をガンガー河に投げ込んだり、中国の工頭が〝出稼ぎ労働者〟売買したり、あるいは妾を囲ったり、淫売等々、ぼくらは何に基づいてこれらを非人道と言うのか？人間は道理を愛するのだ。もしぼくらがそれが人道ではない理由を指し示すことができれば、むろんおおぜいの人の懺悔を呼び起こすことができるであろう。だから、暗黒のなかにいる一般の人が光明を手に入れることができるように、ぼくらはこれらの事柄を頻繁に大衆と協議したい」。

36　例えば、瞿世英は「中國人的劣點　中國社會不進歩的原因」（『新社會』第一号、一九一九、十一、一）で、その「劣点」として「（一）懶惰（二）不誠（三）軟弱與膽小（四）不守秩序（五）欺軟怕硬（六）不講人道」を挙げ、（六）について「ある日ぼくは東安市場へ芝居を見に行き、『小王桂官翻杠子』を見たが、本当にとてもすばらしかった。が、人道を軽視しているところがあると、舞台の下で芝居を見ていたものは、盛んに拍手していた。通りに物乞いがいて、金を与えないのはまあいいとして、多くのものはさらに彼を罵る。車が人をひき殺すと、やはり車の前を人は通るべきではないと言う。復讎とは、とり

もなおさず人間の心を食べ、人間の血を飲むことであり、ともすればその肉を食いその皮に寝ることになる。奴婢は生まれつき奴婢になるのが当然なのではなく、主人になった者にしょっちゅう殴られ叱られる。幼女を妓女にするのも無法であり、人はこともあろうにそれを弄ぶ。種々の非人道は挙げるに事欠かない。人道とはすなわち仁の字であることを知らなくてはならない。不仁であって社会を好くしようとするのは、『南轅北轍』ではないだろうか」と述べている。

37 「〝人道〟目録」（中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局研究室編『五四時期期刊介紹』第一集下冊〔生活・読書・新知三聯書店、一九七八、十一〕所収）に拠った。なお、『ギタンジャリ』は「歌のささげもの」の意で、タゴールの代表的詩集として、一五七篇を収めたベンガル語版が一九一〇年に出版された。英語版は、一〇三篇の散文抒情詩から成り、一九一三年、イギリスのマクミラン（Macmillan）社から出版された。なお、邦訳では『ギータンジャリ』、あるいは『ギーターンジャリ』とも綴る。

38 鄭振鐸「太戈爾新月集譯序」、『文學』第八十五期（一九二三、八、二十七）所載。なお、これは『鄭振鐸選集』下冊（福建人民出版社、一九八四、一）にも「新月集」という表題で収められており、末尾に「選自鄭振鐸《文探》集、上海新中国書局1933年出版」とある。また、鄭振鐸は「悼許地山先生」（『文藝復興』第一巻第六期、一九四六、七）でも、やはり許地山を通してタゴール文学に触れたことを、次のように述べている：「地山は北平の燕京大学に学んでいた。彼の暮らし向きは良いとは思われなかった。彼の費用は閩南のある教会が負担していた。彼はそれ以前に南洋で数年教鞭をとったことがあった。ぼくら世故人情の試練を受けたことのない一群の若者の中では、彼が自然兄貴分だった。彼はぼくらに自分たちが聞いたことのない多くのことを話してくれた。彼のところにはたくさんの本があり、洋書、中国書が二つの書棚にビッシリと並んでいた。これは私がいちばん羨ましかったことである。私は当時まだ車代を節約して雑誌を買うという時代で、本は一冊も買えなかった。私は本が読みたいと思ったら、人に借りるしかなかった。ある日の夕方、太陽の光がまだ西壁を照らしている頃、私は地山の宿舎に行った。書棚に一冊の日本で出版された《タゴール詩集》がひろげられており、読んでみるととても興味深かった。窓

辺に立つと、外はまだ明るかった。窓の外には池があり、そこには緑滴る水草が生い茂り、人工の噴水がさらさらと音をたてていた。／〝きみはタゴールの詩が好きなの？〟／　私は首肯いたが、その名は初めて聞いたものであり、彼の詩も読むのは初めてだった。／　彼はそこで私にタゴールの生涯と詩について語ってくれた。彼は〝ぼくは今、彼の《ギタンジャリ》を訳しているところだ〟と言いながら、引き出しから彼の訳稿を取り出して私に見せてくれた。彼は旧体詩で訳しており、極めて難解だった。／〝きみが気に入るのはやっぱり《新月集》かもしれないなあ〟と、早速書棚から一冊の本を出してきた。〝これが《新月集》だ〟、〝きみに進呈しよう、何首か選んで訳していいよ〟。／　私は胸をときめかせてその本をもって帰った。これが私のタゴール詩翻訳の始まりである。のち、英文のタゴール集は次からつぎにすべて購入したが、本を手に入れた時の喜びということでは、あの時感じた深さはさすがになかった」。

なお、鄭振鐸が許地山から借りた、「小さな緑色の表紙の」「日本人の選んだタゴールの詩」（「太戈爾新月集譯序」）、ないしは同じものを指す「日本で出版された《タゴール詩集》」（「悼許地山先生」）は、鄭振鐸が読んでいるので日本語の翻訳ではなく、英文のものであることが考えられる。郭沫若も「私は一高予科時代に、ひょっとしたことからインドの詩人タゴールの作品に接した。同室のある本科生が、ある時、学校から英文のプリント数章を持って帰って来た。タゴールの『新月集』から選んだ数首の詩だった。『海辺で』『ねむりぬすびと』『あかんぼの世界』等があった。開いて読んで見ると、とくに清新で淡泊な味を感じた。……」（『創造十年』）と述べているように、それは日本の旧制高校用の英語教科書のなかの「タゴール詩集」である可能性が強い（この推理は、もっぱら松井博光、太田進両氏の御教示によった）。しかし、その書籍を特定することは、現在までのところできていない。

39　『飛鳥集』、原題は「Stray Bird」（1916）、代表的邦訳表題は「迷える小鳥」。

40　森本達雄訳『ギタンジャリ』、『タゴール著作集　第一巻　詩集Ⅰ』（第三文明社、一九八一、五）所収、に拠った。なお、鄭振鐸の訳文は、第四十五首の最後の句の「Golden touch」を「金化力」と訳している部分を除いて、全体にほぼ正確に原文

（英文）に対応すると判断できるので、代表的邦訳をあわせて提示することにした。

41　鄭振鐸「『吉檀迦利』選譯」（『小説月報』第十四巻第九号、一九二三、九）には、あわせて七首が選訳されている。二番目に訳されているものは「第二十五首」とあるが、「第四十五首」の誤り。本文に引用しなかった残りの二首を翻訳でここにあげておく。

「わたしは知っている――いつの日か　地上のものが見えなくなり、生命が　わたしの目に最後の帳をおろして、静かに立ち去る日が来るだろうことを。／　それでも、星々は　夜どおしまたたき、朝は　変わることなく　明けそめるだろう。そして時は　海の浪のように高まり、喜びや苦しみを打ち上げるだろう。／　わたしの時間のこの終焉を思うとき、刻々にきざまれる瞬間の仕切は破れ、巧まぬ財宝にみちたあなたの世界が　死の光に浮かびあがるのを　わたしは見る。そこではどんな賤しい座も　すばらしく、どんな卑しい生命も　すばらしい。／　わたしが求めて得られなかったものも、得たものも――みんな　消え去るがいい。ただ、わたしがかつて　退けたもの、見のがしてきたものを　まこと　この手に持たせてください。」（『ギタンジャリ』九十二　本文の引用と同じく森本達雄訳による）

「いま旅立ちのときに、友らよ、幸運を祈ってくれ！　空は　曙光にかがやきわたり、わが行く手は　美しい。／　彼方へ何をたずさえて行くのかと、たずねてはくださるな。わたしは　なにひとつ手には持たないが、期待に心はずませて　旅路にのぼる。わたしは結婚式の花環を頸にかけて行こう、わたしが身につけるのは　赤茶けた旅衣ではない。そして、行く道に危険があろうとも、わたしは　心に　恐れをもたない。／　わたしの旅が終わるとき、宵の明星がかがやきだすだろう。そして、夕べの唄のもの悲しい調べが　王さまの門から　流れてくるだろう。」（『ギタンジャリ』九十四　同前）

なお、『小説月報』第十四巻第九号には、鄭振鐸「迦壇吉利選譯」が別にあり、その末記によれば、一九二三年九月九日に訳されたものである。

42　鄭振鐸「太戈爾傳」、『小説月報』第十四巻第九号（一九二三、九）。

43 鄭振鐸「太戈爾傳（續）」、『小説月報』第十四巻第十号（一九二三、十）。

44 鄭振鐸「太戈爾傳（續）」、『小説月報』第十四巻第十号（一九二三、十）。

45 鄭振鐸「歓迎太戈爾」、『小説月報』第十四巻第九号（一九二三、九）。なお、文中「アメリア」（原文「亜美利亜」）は不詳。

46 「太戈爾的藝術觀」文末に「本文参考書：(1) R. Tagore: "Personality"./ (2) R. Tagore: "Cycle of Spring".」とある。タゴールの『Personality』（邦訳『人格論』）は、一九一七年、ロンドンのマクミラン社の出版。一九一三年アメリカ訪問の際行った英語の講演を集めたもの。全体は (1) What is Art (2) The World of Personality (3) The Second Birth (4) My School (5) Meditation (6) Woman の六章で構成されている。なお、邦訳は由良哲次訳、土田杏村解説『タゴールの人生論』（内外出版株式会社、大正十二年十月）、中村元、我妻和男訳「人格論」（『タゴール著作集4』〔一九六一、八、アポロン社〕所収）などがある。

47 鄭振鐸「太戈爾的藝術觀」、『小説月報』第十三巻第二号（一九二二、二）。

48 同前注。

49 同前注。

50 同前注。

51 鄭振鐸が『小説月報』『文學旬刊』等に載せた、タゴール関係の翻訳・評論、あるいは単行本を表（次頁）にしておく。

* 表中、XY＝『小説月報』、WX＝『文學旬刊』、W＝『文学』（『文學旬刊』改題）、WZ＝『文學週報』。例えば、WY 1201/210110＝『小説月報』第12巻第1号、一九二一年一月十日発行、W096/231112＝『文学』第96期、一九二三年十一月十二日発行、を示す。

52 この時期、鄭振鐸はみずから始めての短編小説の創作をおこなっている。「驚悸」（一九二〇、九、八作、『晨報』一九二〇年九月十七日掲載）、「平凡的毀了一生」（一九二〇、九、三十作、『晨報』一九二〇年十月八日掲載）。

| 表題 | 掲載誌／発行時期 | 著訳分類 |
|---|---|---|
| 「雜譯太戈爾 Rabindranath Tagore 詩」 | XY1201／210110 | 詩 |
| 「雜譯太戈爾詩（續第一號）」 | XY1204／210410 | 詩 |
| 「譯太戈爾詩」 | XY1206／210610 | 詩 |
| 「雜譯太戈爾詩」 | XY1207／210710 | 詩 |
| 「雜譯太戈爾詩」 | XY1301／220110 | 詩 |
| 「太戈爾傳」 | XY1302／220210 | 評論 |
| 「太戈爾的藝術觀」 | XY1302／220210 | 評論 |
| 「譯詩的一個意見 ――『太戈爾詩選』叙言――」 | WX048／220901 | 評論 |
| 『飛鳥集』（「文學研究會叢書」） | 商務印書館／2210 | 単行本 |
| 「論『飛鳥集』的譯文」 | WX079／230712 | 評論 |
| 「再論『飛鳥集』譯文――答梁実秋君」 | WX080／230722 | 評論 |
| 「太戈爾詩一首」 | W081／230730 | 詩 |
| 「太戈爾詩三首」 | W082／230806 | 詩 |
| 「著作家」 | XY1408／230810 | 詩 |
| 「太戈爾詩三首」 | W083／230813 | 詩 |
| 「太戈爾新月集譯序」 | W085／230827 | 評論 |
| 「覲迎太戈爾」 | XY1409／230910 | 評論 |
| 「微思」 | XY1409／230910 | 詩 |
| 「太戈爾傳」 | XY1409／230910 | 評論 |
| 「『歧路』選譯」 | XY1409／230910 | 詩 |
| 「『吉檀迦利』選譯」 | XY1409／230910 | 詩 |
| 「『愛者之贈遺』選譯」 | XY1409／230910 | 詩 |
| 「迦檀吉利選譯」 | XY1409／230910 | 詩 |
| 「關於太戈爾研究的四部書」 | XY1409／230910 | 紹介 |
| 「新月集選譯」 | XY1409／230910 | 詩 |
| 「孩童之道」 | XY1409／230910 | 詩 |
| 『新月集』（「文學研究會叢書」） | 商務印書館／2210 | 単行本 |
| 「太戈爾傳（續）」 | XY1410／231010 | 評論 |
| 「愛者之胎選譯」 | XY1410／231010 | 詩 |
| 「園丁集選譯」 | XY1410／231010 | 詩 |
| 「世紀末日」 | XY1410／231010 | 詩 |
| 「太戈爾詩選譯」 | W093／231022 | 詩 |
| 「太戈爾詩選譯」 | W094／231029 | 詩 |
| 「雜譯太戈爾詩」 | W095／231105 | 詩 |
| 「園丁集選譯」 | XY1411／231110 | 詩 |
| 「雜譯太戈爾詩」 | W096／231112 | 詩 |
| 「太戈爾 (R.Tagore) 詩雜譯」 | W158／250202 | 詩 |
| 「太戈爾詩雜譯」 | W159／250209 | 詩 |
| 「太戈爾詩雜譯」 | W160／250216 | 詩 |
| 「太戈爾詩雜譯」 | W161／250223 | 詩 |
| 「太戈爾詩雜譯」 | W163／250309 | 詩 |
| 「園丁集選譯」 | W164／250316 | 詩 |
| 『太戈爾詩』（「小說月報叢刊」） | 商務印書館／2503 | 単行本 |
| 『太戈爾傳』（「文學研究會叢書」） | 商務印書館／2504 | 単行本 |
| 「太戈爾詩雜譯」 | WZ231／260627 | 詩 |

53 『小説月報』に掲載されているタゴール関連の評論、翻訳等の著訳者は、鄭振鐸を含めて、瞿世英、王統照、許地山など、概して『新社會』のグループのメンバーが多い。鄭振鐸のグループの中で、タゴールが文学に留まらず、哲学、思想を含めて、彼らの共通の関心になっていたことをうかがわせる。

54 瞿世英「送頌華仲武二兄暨秋白赴俄」〔菊農〕、『晨報』(一九二〇、十、二十五)。なお、瞿秋白の『餓郷紀程』に引用されているこの詩は、表題が「追寄頌華宗武二兄暨秋白姪」であり、詩の本文にも若干の字句の異同がある。

55 瞿世英・鄭振鐸「太戈爾研究」、『晨報』(一九二一、二、二十七)。なお、この「太戈爾研究」は、『晨報』の一九二一年二月二十八日に「(一)(續)」(瞿世英)、さらに同年四月三日に「(二)(續)」(同瞿世英)が載っただけで、事実上連載は立ち消えになっている。

56 鄭振鐸「宣言」〔本刊同人〕、『文學旬刊』第一号(一九二一、五、十)。

57 鄭振鐸「文學的定義」〔西諦〕、『文學旬刊』第一号(一九二一、五、十)。

58 鄭振鐸「文學的使命」〔西諦〕、『文學旬刊』第五号(一九二一、六、二十)。

一九八六・九・十三(了)